

次のみならず七次を七十倍せよといはれたりき(マトフェイ十八の廿二) 聖キプリアン曰く食を請願したる後罪の赦を請願するはこれ神は養はるゝ所の人神よりて生活せんが爲なり及びたいゝ暫時の生活を慮らずして永生を慮らんが爲なりもし主が負と名づくる所の罪を免るさるゝならば永生は達するを得ん福音經いふ汝が負ふ所の者をみな汝は免す汝我を求めしと困りてなり」と(マトフェイ十八の三十二)さらば我等罪人たる者をして憐みを神は願ふて中心自ら認むる所あらしめんとて罪の爲は嘆願をなさしむる此記憶は幾ばくか緊要として幾ばくか親切に且救を得べきものなる我等は恰も無罪者の如く自ら足れりとするの心を除かんが爲及び高慢は由りて亡ぶるの危きを逃

れんが爲は我等は日々罪の爲は祈禱するを命せらる、且此をもて我等日々罪を犯すとの記憶と教訓とをも與へらるゝなり使徒イオアンも其書は此事を指示していへらくもし我等罪なしといはい自ら欺きて眞實は我等は負ある無しもし我等の罪を認めれば彼は信實なる者且公義者なるか故我等の罪を赦さん「イオアン一書一の八九」彼は我等が罪の爲は願ふべき所以と願へば必ず赦しをうくべき所以とをも其書中も含めたりけだし彼は主を信實なるものと名づけ即其の約束を信實に履行する者と名づけたればなり罪と負との爲は祈禱すべきことを我等は教へし者は父の憐憫と又それによ隨ふの赦をも約束し給へり主は或る條件と約束とを以て我等を保護するの法を明し此は添へ我等をし

我等も負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ

四

て必これより願はしむるはけたし我等己も負ある者も對して赦さずんば我等も罪の赦しをうくる能はざるべきを知りて我等も負ある者を我等赦すが如く我等も負を赦されん爲なり故も主は又他の處に於てもいへらく『汝等何の量を以てか量る、その如く汝等も量られん』マトフイ七の二三よりながら夫の僕は主人の其債をみな免したるも反して其友は免すを欲せざりき、よりて獄に投れられて主人のわらはせる寛容を失へり、何となれば其友は寛容をわらはすを欲せざりしよよるなり、且此事を主は其誠命に於て裁判の更も強く且大も嚴しきをもてあらはし給へり、いへらく『立ちて祈禱する時もし人々悔みあらばこれをゆるせ、天よいます汝等の父も汝等よその罪を免さんが爲

なり、汝等もし人々免さざれば天よいます汝等の父も汝等よ其罪をゆるさば、いらん』マルク十一の廿五、廿六、然らば裁判の日も於て汝も何等の宥免もあるなく、汝は自ら判決したる如く裁判かるべく自ら他も行ひし如く、汝も行はれん。

『神はたゞ平安なる者と和合する者と同心なる者とのみ神の家も居らんとを命じ給へり、又更生せられたる者は其の第二の生を得しめられたる如く、よして止まらんことを欲するなり、即神の子となりし者は神の平安も永く止まらんことを欲し、一の精神たる所の我等も一の心と一の感情のわらんことを欲するなり、神は互に敵視する者より献祭をうけ給はず、此の如き者よは祭壇より復りて先づ兄弟と和睦せんことを命せら

我等も負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ

百九十五

をこれ其の和睦したる後平安なる祈願をもて神を和ぐるを得んが爲なり。神の爲は大きな献祭は我等の平安と兄弟の間の和合と父と子と聖神の一なるよ於て合一せられたる民となり。アブレイとカインとが供へたる最初の献祭の時、當り神は彼等の献物を見ずして其心を監給へり。よりて心を以て神を悦ばしめたる者は献物を以ても悦ばしめたる。平安よしして且義なるアブレイは無罪よしより神は祭を献げて他の祭壇に献物を供ふる者も教訓を興へり。即神を畏るゝの畏れと純一なる心と義の法と平安と和合とをもて彼處に詣るべきを教へたり。此の如き心情をもて神は献祭して彼は其後自らも神への献祭となり。主の義と和平との守護者となりたり。彼は首として致命の苦みを忍受

へ其血の光榮をもて主の苦難を預表したりき。ア、此の如き者は終へ主より榮冠を蒙むらん。此の如き者は審判の日よ於て主と共に審判せん。これ反して互に相敵し互に相争ふて兄弟と和がざる所の者は福なる使徒及び聖書の證に依るよたとへハリストスの名の爲は死をうくるといへども其の兄弟を憎むの罪は全く免されざらん。コリンフ前十三の三聖書よいへり。凡そ其兄弟を憎む者は即殺人者なり。イオアン一書三の十五殺人者は天國に達するとも神と共に居るとも能はざるなり。ハリストスに傲はんよりも寧ろイウダに傲はんを欲する者はハリストスと共にあるとわたはず。ア、此の罪は血の洗禮を以ても洗はれずんばこれいかなる罪なるや。此の干犯は致命を以ても消拭ふとわ

たはずんばいかなる干犯なるや。

ニスサの聖グリゴリイ曰く言は進みて道德の頂上へ登りぬけだし祈禱の言は神も就く所の者道德の要求も循ひていかよあるべきを要するを象り最早人性の界限の外へ立ちて道德上神も肖るを示すなりよりて其者は本来獨り神も属する所の事を爲して一見したる所にては彼は自ら第二の諸神となるなりけだし負を免すは神の性質として神より外誰か罪を免すとを得んルカ五の廿二といへる如く特別の性質なればなり故ももし誰か此の生涯に於て神の性の特質も似たるあらんは彼は自ら或る形状に於て其の眞も似する所のものと同形同様なる者とならん。

「されば此の言は何を教ふるか第一先づ行ひし行作もより權理を得て神も似たる自ら免したるもよりを勇ましく自ら謙認するや其時は最早敢て神を己の父と名づけて己が従前の罪の赦しを願ふべきことを教ふるなり何となれば願者はみな悉く其の望む所をうくるを得べきは非ずしてたゞ勇氣もして願ふの權理を自ら實行もよりて得たる所の者はこれをうくべければなりけだし主は今いふ所の言にて直ちも此事を我等も訓示するなり即恩惠者も近づかんとせば自ら恩惠者となれ善者も近づかんとせば自ら善者となれ義者も近づかんとせば自ら義者となれ寛忍者も近づかんとせば忍耐する者となれ仁慈者も近づかんとせば仁慈者となれ且やすべて仁心ある者慈悲深き者至て

寛大なる者衆人を憐む者は近づかんとせば自らも彼等の如くなれば、
ゆながらもしなほ神に属する所のものを發見するならば全く己の甘
心同意をもて自ら其れを匹似するをなして祈禱に於るの勇氣を自ら
己れに得よこれより悪者の善者と親む能はざる如く不潔汚穢をも
て蔽はれたる者の清者及び不汚者と交際する能はざる如く神の仁慈
に就く者をして其の殘忍より離れしむるなり故に誰か負の爲に人を
己の權に繋ぎて殘忍にこれを遇するならば彼は其の品行をもて己を
神の仁慈より離し遠ざくるなりけだし仁慈と兇惡と愛すべき心情と
殘忍とは何の交りのこれあらん死の捕虜となりし者は最早活きざる
如く生を樂む者は死より遠ざかる如く神の仁慈に就く所の者もすべ

てもるゝの殘忍より必ず遠ざからんさてすべて所謂惡習と稱する
ものゝ遠ざかりし者は靈智が認めて以て神性を爲す所のものを己れ
に發達せしめつゝかくの如き性質より或る形狀に於て諸神となる
なり。

「汝見るか主は此の祈禱の言をもて或る方法により人の性を神の性
に變じ神に就く所の者をして自ら諸神とならしめむが爲に法を立てし
聽者をいかなる高尚に昇すをさりながら神の言の全く高尚なるを誰
か能く當然に發揮するを得るか彼れに籠る所の意思は言語の解釋の
能く及ぶ所をあらざるなり此の時當りて我の智識を生じ來る所の
意思を智識に留置さへも既に大膽なりましてこれを言ふあらはすは

更よいよ〜大膽なるべし。げだし何を言ふか善は發達する所の者も神の擬してこれに倣ふと使徒が「我れハリストスに倣ふ如く汝曹我れに倣ふ者となれ」コリント前十一の「一」といへる如く爲し給ふよより一轉して汝は善に對する汝の心情をして神の爲に標準とならしめんとを要求せらるゝ是なり或る方法よより秩序は變更せられたり故に我等神に倣ふよより善なるものが我等に於て成就せらるゝ如く神も我等或る善に發達する時は我等の行に倣ひ給はんを我等は敢て希望するなりされば汝は神に近づけて左の如くいひ得るなり曰く「我がなし所のものを汝も爲し給へ汝は其僕に倣へ給へ主よわらゆる者よ王たる汝は不幸極貧なる者よ倣へ給へ」ア、我は罪を免せり汝も我を

責むるなかれア、我は願者を尊敬せり汝も願者を斥くるなかれア、我は吾に負ある者を免して樂ましむ汝も負ある者も其の如くなるべし。ア、汝も負ある者を我に負ある者よりなは憂苦ましむるなかれア、二者をして二つながら其憐を垂るゝ所の者よひとしく感謝せしめよ。ア、我も負ある者よも汝も負ある者よもひとしく免すとは兩者の間も居る中保者にて確定せらるべし。我も負ある者はかくの如き者にして汝も負ある者は我なり我れも負ある者の爲に我が決行せし所は願くは汝も勢力を有たんとをア、我は豁免せり汝も豁免せよ。ア、我は免せり汝も免し給へ。我は同種人よ大なる憐をあらはせり主よ汝も汝の僕の仁慈に倣ひ給へ。且や汝の前も犯したる我の罪は我も負ある

る者の我は對して爲せる所の者より重きと論を俟たす我れ亦此を識認す。さりながら見よ汝はもろくの善は於て幾ばくの特權を有するか汝が權柄の餘は相應する所の憐みをもて罪を犯したる我等は賜ふは汝は當然なり我は小なる仁慈をあらはせり何となれば我が天性はこれより大なるものを容れざればなりされど汝は幾ばく欲するも權柄は汝の大なる恵み深きを妨げざるべし。

「さりながら先づ負といへる祈禱の言をいよ／＼仔細に會得するを力めん、けだし此言の旨趣を討究するは我等の爲も高尚なる生活に達するの或る誘導となるべければなり故に人性が服する所の負とはいかなるものにして我等の權よて免す所の負とはいかなるものなるか

を考究せん此を識認するは神の善の大は餘りあるを知るの十分なる瞭解を我等は得しむべし故にこゝに神は對する人間の罪を數へん人が神罰の罰は服したるは第一人を造りし者より背き離れて反對者よ降服したるが爲なり第二自主自由の權を惡なる罪の奴隷たる位地と交換し毒害なる勢力の虐待の下にあるを神と共に在るより尙重んじたるが爲なり然れども此の造成者の美を仰ぎ觀ず顔を轉じて罪の醜惡に向ふは諸惡の中第二と爲すべきか神與の善を輕んじて却て惡者の欺騙を重んずるは如何なる罰に當るべきものと思ふか創造の始めに於て我等は印されたる形像を抹殺し神なる性質を損壞し父の食卓より遠ざかり惡臭を發する豚の生活と親昵みて貴重なる富を濫費

するが如きすべて此等の罪は數ふるも何の辭を以てすべきか。
「されば人間はかくの如き罪の爲に神より罰をうけざるべからざるより神の言が祈禱に於てあらはせる教導をもて我等を教へて神と祈禱に於て談話せしむるは思ふに此れが爲ならんけだし吾等及び衆人中人間の罪より大に遠ざかる者ありといへども己れは潔き良心を有つものゝ如く敢て前進せんとは斷じて能はざればなりけだし或は思ふ者あらん恰も夫の富める少年の如く己の行を誠命にしたがひて正しく開發し少年と同じく己の行を自ら賞讃し神につげて是れ我れ幼よりこれを守れり」マトフェイ十九の二十といはんと剩へ彼は自ら己を假定して思ふやう我れ何事な於ても誠命に反きて罪を犯ししとあら

ざれば夫の罪を犯しし者のみ利益なる負を免されんと願は我れは極めて不適當なりと彼れいへらくかくの如き言は淫慾にて汚されたる者には適當なり或は貪欲の爲に偶像崇拜を罪せられたる者ありては赦を願ふと緊要なり総ていかなる犯罪を以てか良心を傷つはたる者ありては憐憫に趨くは殊勝にして且は必要に應ずるものとす。さりながらもし彼は大きなイリヤならば或は「イリヤの精神と能力と」ルカ一の十七を以て舉動する者ならば或はペートル或はパウエル或は其他神の書に於て卓越を證明されたる者等の中は列るならば何の爲にかくの如き言を用ひんやいかなる罪の負もなき所の者にして負の免しを請願すべきかとこれ或は答ふ或は此の如きの事に着目

る者ありて其の天性のいかなるをも知らざりし彼のフリセイ人の如く高慢に陥るを免れしめんが爲なりけだし若し彼は人たるを知りしならば其天性を汚穢より清まりしものとは思ふべからざるを聖書によりて學びしと無論ならんいへらく人々ありては一日の生活も汚れなくして在り得たるを見ずとイオフ十四の四五故に祈禱をもて神に就く所の者も此の如き思を心よ生せしめざらんが爲に神の言は誠命し其の己れの上進を見ずして人性一般の負を自ら想起さしむるなり此の負は天性に關係するものとして悉くの人類は自らこれに關係を有つと疑なし故に罪の赦しを賜はらんが爲め裁判者よ嘆願すべきなり

「けだしアダムが我等も生活して我等各々人なるより我等は己の天性に於て此の皮製の長襦袢衣と此の物質的生活の速に萎むべき枝葉とを見る即永遠清明なる祭服を脱ぎて代ふるに損處を補綴れるものを見てし神なる衣服に代ふるに自ら嬉戯と名譽と一日の榮と人を殺す可き肉体の樂みとを以てして此の我等が居るべきに罰せられたる肉慾の住所を眺めんさりながら其間もし我等は祈禱に於て眼を東方に轉じこれと共に清明なる東方の樂土より逐はれたるを心よ自から想起すや此の生活の善からざる無花果の樹に蔽はれ神の目より斥けられ自恣として蛇に服従したる我等もまた其時は當然に此の祈禱の言を附加へんそれ此の土を食ひて地に匍匐し塵上を腹行する所の蛇は

我等も亦同じく其の如く行作せんを勸む、即地上の逸樂も耽り地
も匍匐し地も曳く所の思ひて其心を充たし以て腹行せんを勸む、即
奢侈なる生活の爲も慮らんを勸むるものなり、我等は此の如き境遇
ありて彼の放蕩の子の如く豚を飼ひて久しく止まれる災難の後
至り一朝我れも歸り在天の父を自ら己れも思惟するあらば其時は此
の「我等も我か負を免し給へ」といふの言をいみじくも益用せん。
「故またとへば誰かモイセイたりとも又はサムイルたりとも又は其他
徳行をもて頌讃せられたる者等の中もありて敢て他も劣らざる者た
りとも彼は人なるが故もアダムの天性も關係を有つ者として彼の墮
落も分ある者として此言を己の爲も適當なるものと思ふべし、さりな

がら我が此く言ふは或者をして此事の一般普通なるを一見するも由
り言ふ所のものを瞭解するを得しめんが爲なり、されどもし誰か此の
言も於て眞實の旨趣を尋ねんとするならば思ふも我等の爲も其意思
を天性も對する一般普通の意見まで高むるの要あらざらん、何となれ
ば生活上各行作もつきて憐憫を願ふを緊要とするが爲もは良心もて
足ればなり。

「けだし我等の生活は此の世も於て靈魂と瞭解とも於ても身体の感覺
も於ても種々多様の感化も屬するが故一の或る情慾を以てなりとも
罪も引誘せられざらんを難く或は亦全く能はざるものとす例へば身
体も關しては此の生活を樂むの愛すべき喜樂は我等の五官もより互

相通じ又靈魂は關しては智慧の進向と自由の運動とに於てこれを
あらはすされば誰か彼と此との生活に於てもろく悪習の汚穢を除
くを得るだけ高尚にしてそれ丈に善智を賜はりしものありや誰か目
よて罪を犯さざりしや誰か耳よて無罪なるを得しや誰か此の禽獸の
如くなる咽の快樂に遠ざかりしや誰か觸覺よて罪に關係するを免れ
て潔きを得しや聖書に録する「死はのぼりて牖より入る」イエレミヤ九の
廿一といふの隱語は誰かこれを知らざらん聖書は五官を牖と名づけ
たり靈魂はこの牖より外部の事物に交りて擇んでこれを取るより
て其事物は死の入り来るが爲に途を啓くなり實に目は屢々多くの死
の入口となるなり彼は己を凌辱しめたる者を見ては激怒し功勞は依

らずして安樂に消光する者を見ては嫉妬の念を燃し高慢なる者を見て
は憎惡に陥り或る珍重すべき物又は美麗なる顔容を見ては其意に適
する者を強求めんとして全く滑落ちるなり又耳は其聞く所のものと
共に多くの情慾を心に納るゝ時は即畏懼悲哀忿怒満足渴望法外の傳
説又は其他これに類するものを納るゝ時は死の牖を啓くなり且や味
官の樂みは或人のいひし如く陸續として沓至るもろくの惡の母た
るなりけだし大抵生活上に於てもろく罪惡の根となるものは咽の
爲に慮るゝあるとは誰か知らざらんや奢侈醜陋美食放埒の行大食飽
足遊蕩の生活耻づ可き慾に陥ると禽獸の無智の如くなるはみな彼れ
よかゝるなり又これと同様觸覺の官能もあらゆる罪に至て接近なる

境を成して凡て好色者が身体の爲に爲す所のものは觸覺の病に屬するなり、これを詳細に書さんとせば長くして盡くるなからん、且や靈魂と自由とよかゝる罪の全群は何の言か數へ了るを得ん、聖書に「心より出づる者は惡き念」マトフェイ十五の十九といひてこれに添ふる念によりて我等を汚す所の箇條を以てす、さらばもし我等の爲に凡ての官能と心と屬する靈魂の感動とよて罪の羅網を處々方々より張らるゝならば睿智者のいふ如く「誰か我が心を既に深めたりと誇るを得んや」〔箴言廿の九〕誰か穢れたるより潔まりしや、イオフ十四の四〔さて靈魂の清潔を汚すの汚穢とはこれ即靈魂を以ても身体を以ても思念と官能とを以ても心の感動と身体の動作とを以ても幾多の種類と幾多の方

法とよより人間の生活に混じ來れる逸樂是なり、されば誰か靈魂を此の汚れより潔うするを得るか。

「されば此のすべては我等よりあるありて凡そ我等と同じき天性を有つ所の者は常に必ず天性の罪に關係を有つよより我等は祈禱に於て神より俯伏してこれが爲に我等より負を免さるゝことを願はん、さりながら我等其のわらはさるゝ所の恩恵を分ちて人と共にするを美事善行となして我等の良心も共にこれを呼ぶあるよあらずんば此の如きの聲はうけられざるべく神の上聞に達せざらん、蓋もし誰か仁慈は神に適すと想定するならば其これをもて美事とするの斷定を自己の行爲にて證明てんことを彼より促すは當然なり、これ其の義なる裁判者より「醫は

自ら醫すべし』との聲を自らさかざらんが爲なり。仁慈を我れは嘆願するも汝は自らこれを近者と相分たす汝は負を免されんとを願ふされども何故自分は負ある者を苦しむるか汝は對する債の券は汝これを塗抹れんとを嘆願すれども汝自分は他の汝より借りたる負債の名簿を勉めて守るか汝の負債の計算は減せられんとを願へども自分は他の負債の額を高利をもて増殖すか汝の負債者は獄にわれども汝は祈禱の家よあるか彼は負債の爲に苦しめども汝は負債の免さるゝを請願するか汝の祈禱はさかれざるなり何となれば苦痛する者の聲はこれを打消せばなりもし汝は有形上の負を免さば心靈上の鎖は汝は釋かれんもし赦さば汝も赦されん汝は自ら己の裁判者となり自ら己

れは法を命じ汝の足下は在る者よ對しての措置よりて汝は自己の爲の判決を上より宣告せらるゝなり。

「故は慈悲と赦免との祈願を神よさしげんと欲せば良心の勇氣を預め備へて己の行爲を其言ふ所の祈禱の爲に仲保者としてあらはさん」我等は負ふ者を我等免すが如く」と眞實に言ひ得べからんが爲なり。

イエルサリムの聖キリール曰く「我等の負を我等は免し給へ云々」けだし我等は罪多ければなり我等は言を以ても行を以ても陥り定罪に當るべきものを我等は甚だ多く行ふなり故にもし罪なしといはいこれ我等はイオアンの言ふ如く言ふなり「イオアン一書一の八」我等免すが如く云々」これ我等は近者よ負を赦すごとく我等も罪を赦されんことを

我等は負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ

二百十八

嘆願して神と約定を爲すなり故に我等は何物も換へて何物を受くるを心よ想ふて互に負を免すに於て躊躇ふとをなさいらん人の我等は對して爲せる所の舉動は小にして重からず容易く拭消さるべしといへども我等が神に對して爲せる所の罪は大にして唯一の神は固有なる慈悲に須つあり故に汝は謹慎むべし汝は對して重からざる且は小なる罪の故に最重大なる罪の赦を神よりうくるを自ら遮るべからず聖金口曰く更に生るゝ浴盤より出し後も罪を犯すとあるべきより救世主は此の場合に關しても大なる仁慈をあらはし罪を免さるゝとの嘆願をもて仁慈の神に就き左の如く言ふべきを我等に命じ給ふなり曰く「我等は負ある者を我等免すが如く我等も我等の負を免し給へ」

汝は神の慈悲の淵を見るか、肝にこれ我等に賜りたる洗禮の浴盤に於てかくの如き惡を消滅したる後、恩寵の言ふ可らざる大事の後、再び罪を犯す所の者に赦を賜ふなり。さて此の祈禱の信者は屬する所以は教會の例規も主の祈禱の始めも共にこれを示す信仰にて照明されざる者は神を父と名づくと能はざるなり。されば主の祈禱は既に信者は屬するならば、又此祈禱は罪の赦しを祈るべきを命するならば、痛悔の作善なる施用は洗禮の後にも廢されざるを疑なし。けだしもしハリストスは此を示すを欲せざりしならば、此事を祈禱するをも命せざりしならん。されども主は罪を論及してこれが赦を願ふべきを我等に命じ、又いかなる方法をもて此赦をうくべきを教へ、且此によりて赦をうく

我等は負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ

二百十九

るの途は我等の爲も易きものとなる時は主は洗禮の後も罪を洗ひ得べきことを自らも全く知り我等もこれを教へんと欲してこゝも此の祈禱の法を入れ給ひしを疑なきなり罪を想起すを以ては我等も謙遜を教へ他も免すの命令を以ては我等も怨恨を絶たしめ且此が爲も我等も赦を與ふるの約束を以ては善なる希望を我等も固めしめ神の言ふ可らざる仁慈を深く思ふべきを我等も教ふるなり。されども主は前述の各求望に於てあらゆる徳行の事と言及ぼしたりしが此の最後の求望をもて更も又怨恨を除き給ふは特も注意すべきなり。それ我等も由りて神の名の聖とせらるゝは完全なる生活の疑なき證據なり、又神の旨の行はるゝも同じく此事を證して我等が神を父

と名づくるは無玷なる生活の徴候なり。されば我等を凌辱する者も對じて怒を止むべき所以は最早此のすべての中も籠るなり。さりながら救世主は此れも満足し給はず我等の間も怨恨を根絶するとよつさいかゝる慮るを示さんと欲して特更も此を言ふなり。さればこの祈禱の後も於ても我等も想起さしむるは他の或る誠命もはわらずして同じく此事の誠命なり。曰く「汝等もし人の罪を免さば汝等の天の父も汝等も免さん」マコライ六の十四「かくの如くなれば此の赦免の係る所は我等もあはるべくして我等が爲も宣告せらるゝ所の裁判も我等の權もあはるなり。愚人中或は大なる過の爲或は小なる過の爲も罰せらるゝあらんよこれに對して己が不平を訴ふるの權理を有するなからしめん爲

よ救世主は罪ある汝をして自ら己れも對して裁判者とならしむるなり、これ恰も左の如くいふが如し、曰く汝が自ら己れの爲よ宣告する所の裁判を我れも汝の爲よ同じくこれを宣告す。もし汝は己の同胞も救さばそれと同じき恩恵を我れよりもうけん此の後者は實も前者より重要なりといへども必ずうけん汝の他も赦すは自ら赦をうくるの必要有ればなり、さりながら神は何物も必要有らずといへどもこれを赦し汝は兄弟も赦せども神は僕も赦し汝は無数の罪も於て罪われども神は無罪なり。又一方よりいへば主は汝の行爲なくしても汝もすべての罪を赦すを得るよ拘はらず此事も於ても汝も福せんと欲するよより自ら其の仁慈をあらはしすべてよ於て溫柔と仁慈とよ達する

の機會と緣由とを汝も得せしめ殘忍の心を汝より逐ひ汝の怒を消して百方汝をして其の諸の肢と合同せしめんを欲するなり汝此も對して陳る所は何事か汝が近者より何の惡か不當もうけしとの事なるか、もし然らば近者は汝も對して罪を犯しよと無論なり、さりながらもし汝は當然もうけしものならばこは近者も於て罪を成さるなり、さりながら汝の神も就くはこれと同様なる罪又は更もますく大なる罪も於てさへも赦をうけんどの目的を以てするなり況や汝は未だ赦をうけざる先きも最早人間の靈魂を守るを學び溫柔を教へられしよ於ては汝のうけし所豈少小なりとせんや然のみならず大なる賞は亦汝の前途も來世もわり、何となれば彼の時は汝一の罪も於ても其計算

を促されざればなり。故もしかくの如き権理を受けし後も我等の救は法意せずしてこれを棄つるならば我等いかなる罰もか當るべきすべては我等が權に在るの處に於て我等自ら己を惜まざるはいかで主は我等の願に注意すべきか。

又曰く主は「我等が……糧を今日賜へて」云言をもて既に我等も高尚なる道學神が我等の爲に慮るを確信して己の哀みを神に負はすとを教へたりしが主は又我等死すべき形体に包まれたる人類として罪に陥らざらんとの能はざるべきを知りて更は祈禱に於て左の如くいふべきを教へ給ふなり。曰く「我等も我等の負を免し給へ」云々此言より我等は三つの善を授けらるゝなり。即主は道德の高點に達したる者

は謙遜を教へ、又己が功勞を依頼まざるべきと畏懼慄びて罪を憶ふと神のパワールの爲したる如くすべきことを教戒せらるゝなり。パウエルは無数の功勞を積みし後、「いへらく」ハリメトスイイススは罪人を救はんが爲に世に來れり罪人の中我れ第一なり。『テイモフイ前書一の十五』我は第一でありきといはずしてなり。といふ、これ彼れ自分の罪を不斷に記憶したるをわらはすなり。故に主は此言をもて道德の最上は既に達したる者には謙遜を安んずべきとを教へ、然して聖洗の恩寵を受けし後罪に陥りし者には救の望を絶たずして靈魂の醫を赦免の療方を願ふべきとを教ふるなり。然のみならず此の言は仁慈を教ふるなり。彼は我等が有罪者を對して温和なるべきと我等に對して罪を

行ふ者は怨を懐かざるべきと彼等を赦して己れも赦しを求め自ら仁慈の量を己れも預備せんとを欲し給ふなり。けだし我等は自ら近者も與ふるだけ我等も賜はらんを願ふて其の負ある者も與ふる所の赦免を同じく己れも請願するなり。

聖カシアン曰く嗚呼神の憐みは得て言ふべからざるなり。彼は祈禱の方法を我等も授けしのみよ。あらず又我等の遵守るも由りて神も悦ばるゝを得べき所の道徳の規則を我等もあはせるのみよ。あらず且は我等をして神の前よさゝぐる所の祈禱をもて常も必ず神も祈願せしめて怒りと哀みとの根本を抜くのみよ。あらず彼は更も其の祈禱する所の者は神の審判の顯はるゝ日よ於て仁慈と愛とを己れも求め得

べきの方法を授け或る手段をもて其の審判者の決定を和ぐべきの權を我等も與ふると恰も神をして我等の自ら赦免したる例も倣ひて我等の罪をも必ず赦免さしめんとするものゝ如し。我等は神も告げて、我等免すが如く我等も免し給へ」といふ。故も凡て主も負ふ者も赦すよ。あらずたい己れも負ふ者も赦す所の者は此の祈禱も依頼て敢て罪の免しを願ふとを得るなり。けだし吾人中或者尤惡しき者は神を凌辱ひるの行を見て大なる犯罪なるも拘はらず往々憐みて大もこれを寛容もするも反りて己れも關はる至小なる凌辱の爲もは殘酷にして許さざる復讐者としてあらはるゝなり。故も誰か己れも對して罪を行ひし兄弟も全心より免さずんば其者は此祈禱もより己れも憐憫を願

ふよはあらずして定罪を願ふなりけだしもし此祈禱よしてさかるゝ
ならば其の自ら爲せる例に従ひて必ずこれに随ふものは許さるゝの
怒りと必ず變らざる罰の決定とよわらずして何ぞや故に我等憐みを
もて審判れんことを欲せば自らも我等より對して罪を犯したる者も憐み
あるべし、けだし彼の不正をもて或る悪害を我等より蒙らしめたる者を
免すだけ我等も免されるればなり或は祈禱の此言をのぶるより己
を宥さんよりも却りて己を罪するをわらはさらんかとの畏れを懷
きて衆民が此を聖堂に唱ふよも拘はらすこれを黙過する者わらんさ
りながら萬民の審判者の前よ於て力めて此る詐術を用ふるは無益な
り、けだし彼はいか様も審判するをさばかるゝ者等より預めわらはさん

と欲せり即其の審判の方法の嚴重にして怒さるものたらんと欲
せざるをわらはし我等が彼れより審判るゝを欲する如く我等も兄弟
の我等より對して罪を行ふ時は其の如く兄弟を審判くべしとなり曰く
「憐みを施さる者は審判かゝる時憐みをうけざらん」イアコフ二の十

三
福音書 ヲウグステイン曰くこゝに負と名づくるは罪をいふと明なり、これ他
時ガリレヤ人の事を主よ告ぐる者ありてピラト其血を祭物に混へた
りといふや主はひかしシロアムの塔の傾覆より壓死されたる十八
人の事を彼よつげて「このガリレヤ人はイエルサリムに住めるすべての
住者よりもすぐれて負ふ罪を者と意ふか」といひ其後これに加へても

し「悔改めずんば亦皆同く亡ぼさるべし」ルカ十三の一―五といひしよりても見るべし。故に此處は負ある者も必ず金を免さんとを要するをいふはあらずして他の我等も對して罪を犯したる者を免すをいふなり。前章「マトフェイ五の四十」は述べられたる誠命は我等も金を免すを命するなり。曰く「汝を訟へて裏衣を取らんとする者あらば外服をも亦取らせよ」とさりながらこれ亦すべて金の負債者も負を免すを定めて緊要とせらるゝはあらずしてたゞ訟へてなりとも拂はざらんと不承諾をいふ所の者も免すべきをいふなり。使徒のいふが如し、曰く「主の僕は争ふべからず」テイモフェイ後書二の廿四。故にもし誰か或は我儘より或は執拗に依り拂ふべきの金を拂はんを欲せざる者ある時は

これを免すべしとなりけだし其の拂ふを欲せざるは二つの理由に依る、即或は拂ふべきものを有たざるに依る或は吝嗇にして他人に屬するものをも貪らんと欲するに依るなり。さりながら彼れと此れとは二つの欲乏を證す。第一は生活上の欲乏にして第二は心靈上の欲乏なり。故に誰かかくの如き者も負を免さばこれその有たざる所の者も免して「ハリステアニン」の行を行ふなり。然れどももし誰か己れに對して負ふ所のものも免さんとの意を心も懷きて拂を爲すべき所の者も溫柔に友情をもてかくの如く行爲するならば即拂ふべきものを有ちなから拂はざるは其人の爲に無論滅亡なるが故に其人を匡正さんとの慮りをもて金の返却の事をば復た心も留めざるならば彼はたゞ罪

を犯さざるのみならず更は有益なる行を爲すなり、これ其人をして他の金を占領して他の何事も比する能はざる心靈上の害をうくるを免れしむるなり、さりながら此の第五の求望は於てもたどへ金の事をば直接に言はずしてすべて我等は對して罪を犯す者の事をいふといへども金の負債の事も亦固より此中にあるは此より推して知るべし、けだし拂ふべきものを有ちながら負ふ所の金を汝は拂はざる者は汝は對して罪を犯すよる、されども汝は此罪を免さずんば「我等免すが如く我等は免し給へ」といふとを得ざるべし。

又曰く我等は負を免さるゝとを願はん、何となれば我等は皆神の前は金を以てはあらず罪を以て負ある者なればなり、汝は或はいはん、汝

曹もかど、余は答へん、我等もど、聖なる主教は汝曹も負ある者なるか、然り、我等も負ある者なり、汝曹も負ある者なるか、吾が君よ、然る可らず、自己は對して虚妄をいふ勿れ、余は自己は對して虚妄をいふよ、あらず、眞實を言ふなり、余は負債者なり、汝等もし罪なしといはば、これ自ら欺きて眞實は我等は在らず、イオアン一書一の八、そも我等は洗禮をうけたりしも、負債者たり、これ洗禮は於て免されざるもの、我等は存するよ、依るよ、あらず、我等生存へつゝ、日々の赦免は必要を有する者の集まり來るよ、よるなり、洗禮をうけしや、直ち逝る、此の生涯より、所の者は何等の負もなし、昇りて、天上に到着せん、天の住所、されども、傾洗して、此世は生存へる所の者は、道德の衰頹より、たとへ、破壊の難生命の船よ、

を蒙らずとも洗淨めすばあるべからざるもの(汲出すべきもの)を己れ
 より多く集むるなりけだしもし洗淨めずんば(汲出さずんば)漸々内部より
 溜りて全船覆没するに至らんさればこゝに示されたる方法をもて祈
 禱するはこれ即己れを潔うするなり流入みしものを汲出すなりもし
 此の如く聖なる祈禱をもて日々己を潔うするを我等より興へられざ
 りしならば我等は洗禮の浴盤に於て吾が諸の罪を洗はれたるより拘
 はらず大に困難なる位地より立てられたりとやいはん視よ主よ感謝す
 べきよわらずや憐恤と祈禱とは我等の諸罪を潔うす我等はたゞ生命
 より必要なる糧(聖なる)晚餐を我等より奪ふべき所のものを爲さざらん、
 たゞ我等を嚴なる定罪より服せしむる所のものを避けん。

「汝等の中誰も自ら己を義人と思爲して」我等より我等の負を免し給へ」と
 言ふの必要なしとする者はわらざるべし汝等は拜偶像よりも拜星よ
 りも魔術よりも遠ざかるべし殺人姦淫強奪妄證及び其他これより類す
 る諸の悪事をも自ら避くべし然れども此の外人が罪を犯す所の者甚
 だ多し人は見る可きよ非ざるものを願欲望見て罪を行ふなりさりな
 がら誰か目の疾く動くを止むるか然れどもし欲するならば目は直ち
 より塞ぐとをも得んさりながら耳を塞ぐとは亦常より必しも能はざるな
 りされば耳は耻づべき言不潔なる言誘惑すべき言悪言非謗の言を意
 より反きて集めん婀娜ゆきたる言をさかば實際より行はずとも耳にて
 罪を犯さざるかそも舌は罪を犯さざると幾何ぞ杯椀より遠ざくべき

ものをさへ犯すと屢なるよあらずや。空談、誹謗、惡言、褻瀆は是れ舌の行為なり。さりながら手は惡事を一も爲さざらしむべく、足は惡く向て進まざらしむべく、目は願望の爲に左右せられざらしむべく、耳は淫蕩醜事を容れざらしむべく、舌は不當なるを言はざらしむべし。然れども誰か能く思念を止むるを得るか。我れは告げよ。我が兄弟よ祈禱する時思は迷ふて那邊よか去り誰の前よ立つを忘れ誰の前よ於て地下よ平伏すとも自ら知らざると屢これあるよあらずや。此の如きの事は各々これを一個一個に分つ時は小事なりといへどももしこれを共一所に集むるならば良心を煩はすべきよあらずや。鉛の汝を壓すると砂の壓すると何の差異かある。鉛は量を以て壓し、砂は數を以て壓す。各々微

々なり、されどもこれを多く集むる時は鉛と同じく壓せん。吁、罪は小なり、點滴よよりて河を成すを見ずや。小なり然れども多數なり。故に我等は負ある者を我等免すが如く」と唱ふる所を實際に行ひて「我等も我等の負を免し給へ」と常々呼び且つ誠實に呼ばん。汝の主なる神は左の如く汝に語り、いはく「免せよ、さらば我れも免さん。汝は免さざりき、これ汝は自ら己れを幸くなり、我か幸くよはあらず」と。故に誰か他は對して己れは腹藏する所あらばそをすべて免すべし。心より免すべし。而して汝はこれと借言と行と思とよて行ふ所の汝の罪は悉く汝は免さるゝと確信すべし。誰か此の地上よ居りて敵を有たざる者やある。然れども彼を愛するは盡力すべし。最猛烈なる敵といへども汝が敵

を愛さずして自ら己れに被むる丈の悪は汝に被らしむるを能はざらん。彼は或は汝の田、或は汝の家畜、或は汝の家、或は汝の僕、或は汝の婢、或は汝の子、或は汝の夫、又は婦、或はもし權を與へられなば汝の肉体も更なる害を蒙らしむべし。されども汝は敵を免さずして己の靈魂を害を蒙らしむる時は其の破壊すると此のすべてが破壊するだけ止まらんや。愛する所の者よ我れ汝等願ふかくの如き完全な進行せよ。これをもて能はざる事と爲すなかれ。余は敵を愛するのハリストス・ア・ニンを知る否。既これを知れり實際これを見たり。我等は此事に於て効を見んと欲せば此事の能ふべきを信せよ。且此に就ても神の旨の汝等成らんを祈るべし。さて汝の敵の汝を怒ら

しむるは何物なるか。人間の天性にあらざるを無論なり。彼れ靈魂と身体とを有てるより汝は彼を敵とするか。けだし汝も同じくこれ有るなり。汝に靈魂有れば彼も靈魂有り。汝に身体有れば彼も身体有り。彼は汝と同性者なり。兩つながら地より造られ。主よりて生氣をいれられたり。彼は汝と同じ。されば彼を視て己の兄弟と爲すべし。元始の兩人アダムとエワは我等の父母なり。アダムは父としてエワは母なり。故に我等は兄弟なり。さりながら汝は此の我等の長子たる權を棄つ。神は我等の父として教會は母なり。故に我等は兄弟なり。然れども汝はいはん。我の敵は異教人なり。イウデヤ人なり。異端者なり。と。さりながら祈禱せよ。さらば彼も汝と同じ。すべくして。もろく。他の人々と共

汝等の敵意は漸盡らん。

「されども汝等は皆いはん誰か此を能くするか誰かかくの如く行ふか
ど神は汝等の心よ於て此を成さしむべし余もかくの如く行ふ者の少
敷なるを知る然れどもかくの如く行ふ者は大なり其者は實は神は
する者なり教會は忠よして祭台よ就きハリストスの体と血とを頌く
る所の者は皆かくの如くなるか皆此の如くなるかさりながら皆我等
は負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ」といふなり神が彼
等よつげて我の誠命したる所を汝等自ら行はざらん時も我の許約し
たる所は我れこれを履行するやう汝等これを我れ願へよといは
豈當然なるか神は何を許約したるか汝等の負を免すと是なり何を誠

命したるか汝等も其の負ある者よ免すと是なりさりながら汝等敵を
愛さる時はいかんして此を行ふといひ得べきかされども汝等はい
はん兄弟よ我等いかよ爲すべきかハリストスの群は減少していかに
微なるよ至るべきかもしたゞ獨り敵を愛する者のみ我等は負ある者
を我等免すが如く我等の負を免し給へ」といふべくんば余は爲す所を
知らず言ふ所を知らざるなりと我は汝等よいはんと欲す汝等敵を愛
さずんば祈禱するなかれとさりながら余はこれを言ふを敢てせざる
なりたゞ特は汝等よつぐ愛さんが爲す祈禱せよと余は既よいひしよ
わらずや汝等敵を愛さずんば主の祈禱よ於て此の我等は負ある者を
我等免すが如く我等の負を免し給へ」との願を言ふなかれとさりなが

らもし此を言はずんば汝等の罪は汝等よ存せん且や一步を進めていはん汝等もし言はずんば免されざるべくもし言ふも行はずんば同く亦免されざらんたゞ一の存するあり即免されんが爲よ言ふべく且行ふべきなり。

ハリストス主はいへり『免せよ然らば汝等免されん』ルカ六の三十七さて汝等は祈禱よ於て何といふか『我等よ負ゆる者を我等免すが如く我等の負を免し給へ』といふなり主よ我等の免す如く免し給へ天よいませ父よ我等よ負ゆる者を我等免すが如く我等の負を免し給へとこれたゞ言ふのみなるか否汝等は此を行はんを要すもし行はずんば汝等は亡びん敵よして免しを願はゞ直ちよ彼よ免すべしされどもては汝

等の爲よ多しと爲すべきか敵が怨を懐き惡を爲す時よも汝は之を愛するならば汝の爲よ多しと爲さんさりながら謙遜の願をもて汝よ就く所の人を愛するは汝の爲よ多しとせんやさりながら敵が怨を懐く時よも汝の彼を善く視んとを余は願はんよ欲す敵の惡意を忍耐して父や彼等を赦せけだし彼等は爲す所を知らずルカ廿三の三十四といひし主を汝の想起すを願はんよ欲するなり余は特よ此を願はんよ欲す即敵が汝よ向て惡しき謀を逞うする時よも汝は此の如き言をなしたる汝の主神を仰望まんを欲するなりけだし汝はいはん彼は主なりハリストスなり神の獨生子なり肉身となれる言なりよりてかくの如く爲したれども我れ惡くして且薄弱なる人よありてはいかよしてか

く爲し得んやどもし汝は主よ倣ふを汝の爲よ多しとなさば汝は其の
同僕を思ふべし聖ステファンは石殺せられたりき石撃の下よありて彼
は膝を屈め祈禱していへり主よ此罪を彼等よ歸するなかれ行傳七の
六十彼等はステファンよ石を投じ赦しを望まざりきされどもステファン
は彼等の爲よ祈禱したり余は汝よかくの如き者とならんを願ふ少
し起てよいかなぞ常よ其心を下よ即地よ曳去るか心を擧て上よ向
けよといふを聞くかされば起てよ敵を愛せよもし敵が悪意を懷く時
よ愛するとわたしはずんばせめては赦を願ふ時よなりとも彼を愛せよ
兄弟よ我れ罪を犯せり我れよ赦し給へと言ふ所の人を愛せよもし此
の時よ於て赦さずんば余は汝をもて己の心より祈禱を抹殺すといは

はず生命の書より己を抹殺すといはん。

「故よ敵が赦を願ふ時は彼を解けよ彼よ對するの恨を心より解け余心
より恨を解けといふ獨り負の催促のみよわらず思ふよ汝はいはん彼
は自ら偽り我を欺騙くどア、他の心を審判く者よ我れよ汝が父の思
をのげよ汝が自己の昨日の思をのげよ懇求めて赦を願はよこれを免
せ全くこれを免せもし免さずんば汝は彼を害するよわらず己を害す
るなり汝は僕たる者よして其同僕よ免さずさらば彼は自己と汝との
主よ至りつげていはん我が主宰よ我れ吾が同僕よ我を免さん事を願
へりされども彼は免すを欲せずア、汝は免し給へとさらば主宰は無
論これを免さんかくの如くなれば彼は其主より釋かれて退き汝は精

られて止まらん。いかゞ縛らるゝか。祈禱の時來り汝が主よつげて「我等
 を負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ」といふべきの時近
 づかば主は汝に答へていはん、「あしき僕よ汝我れを求めしよより我れ
 その債を悉く汝に免せり我が汝を憐みし如く汝も亦汝の友を憐むべ
 きよわらざるや」マテフニ十八の三十二、三十三と。そも此等の言は我の心
 より出づるよはわらず福音經よりていふなり。さりながらもし汝は
 嘆願せられて赦を請ふ者よ赦すならば最早汝は侃々として勇ましく
 此祈禱をいふとを得べし。たとへ汝は未だ其敵を愛するとわたはずと
 いへども此祈禱をいふとを得べし。曰く「我等を負ある者を我等免すが
 如く我等の負を免し給へ」と。

又曰く「我等よ我等の負を免し給へ」と。我等はかく云ひ且いはんとす。け
 だし我等は眞實を言ふなり。此の肉体よよりて存在する者の中誰か負
 を有たざる者やある。人類中誰か此の祈禱の己れよ必要なき様よ生活
 するものやある。彼はかくの如く自ら尊大よ構へるとを得べし。さりな
 がら眞實よ此の如き者となるとは能はざるなり。我等よ最善なるは税
 吏よ。傲ひてファリセイの如く高慢せざるよあり。彼は殿よ入り己が功德
 よ誇りて疵を蔽へり。されども神や我れ罪人を憐み給へ。ルカ十八の十
 一十三といひし者は何の故よ殿よ入りしかを極めて好く知れり。我が
 兄弟よ深く思ふべし。かくの如く祈禱すべきとを主イエスは其の門
 徒等よ教ふ。即其の大なる第一の使徒我等の先導者たる者等よ教へ給

へり。されば我等の先導者等として己の罪の赦されんを祈りしならばまして我等は此く爲すべきよあらずや。それ信經に於ても救の攝理を示さるゝ他の善業の中は於て汝等は罪の赦されんと。聖洗よりてを誦するなり。罪の赦さるゝは二あり。一は一次與へらるゝものとして他の一は毎日與へらるゝものなり。一次與へらるゝものは聖洗に於て與へられ而して毎日與へらるゝものは我等此世に存在する間は主の祈禱に於て請願するなり。故に我等は「我等の負を免し給へ」といふなり。神は「我等は負ある者を我等免すが如く」と祈禱に於て言ふべきを我等は教ふるや。我等と條約を爲し。確なる手記をもてこれを固め給へ。誰か「我等の負を我等免し給へ」との言をして實効あるものとならしめ

んと欲せば「我等は負ある者を我等免すが如く」といへる言をして眞實ならしむべし。さりながらもし彼は此の後の言を或はいはず。或は偽りていふならば。前の言も徒らにいふなり。故に余は不斷に汝等と勸めていふ。凡そ人々對して己の心は懐く所のものを免せ。神の見る所は於てこれを免せといふなり。或は口は免して心は免さざる者あり。即ち人々の爲に口よて免せども。神を畏れずして心は免さざる者あり。全く免すべし。汝等此時に至るまで何か留めて免さざりしものありども。今は全く免すべし。決して太陽をして汝の怒中よ没らしむべからず。然るよ太陽が此の如く汝の怒中よ没りしを幾次なるか。怒は何も無きものなりと思ふなかれ。預言者はいへり。我が目は憤怒よりて擾さる。聖詠六の

入らざりながら目の擾されたる者は太陽を見ると能はず、智慧の目の怒
 りて擾されたる者も智慧なる太陽を見ると能はず、怒とは何ぞや、復讐
 の渴望なり、罪人は復讐を渴す、然れどもハリストス主は復讐せざりき、
 聖なる致命者も復讐せざりき、且や神の寛忍はハリストスの敵の改心
 せんが爲及び致命者の敵の改心せんが爲、待つあり、然るも我等はい
 かなる者なれば復讐を尋ぬるか、もし神は吾人より復讐を捜さんと欲
 せしならん、は吾人何處に隠るべけんや、さりながら何に於ても罪を
 らざる彼は復讐を尋ねずして却てすべてに於て罪あり、且は日々神
 を凌辱する所の我等はこれを尋ぬるなり、故に免せ心より免せ、汝は怒
 怒れり、されども罪を犯すなかれ、預言者の教ふるが如し、曰く「怒るも罪

を犯すなかれ」聖詠四の五、汝等は人なるもより憤懣の氣の勝つ所とな
 りて怒らん、然れども怒りを己れに留めて罪を犯すなかれ、もしこれを
 留むるならば、怨恨に至らん、怨恨は即舊染たる怒なり、怒が舊染たる者
 となる時は、怨恨と名づけらるゝなり、新しき時、怒なるものは舊くな
 る時は、怨恨といふ、怒は尖木として、怨恨は梁木なり、もし我等は怒る所
 の者を尤めて自ら心、怨恨を貯ふるならば、主の言は我等に適用せん
 曰く「汝兄弟の目、物屑のあるを見て己が目、梁木のあるを知らざる
 は何ぞや」マトフェイ七の三、何故尖木は成長して、梁木となるか、直ち、板
 取らざりしが爲なり、幾次か汝は汝の怒中、太陽を出没らしめて、其怒
 を舊染たるものとなしぬ、汝は怒りの爲、嫌疑と邪推とを多く寄集め

て尖木は灌げり灌ぎては培養し培養しては成長せしめ以てこれを梁木と爲しぬ少くも汝は左の宣告を怖れよ曰く凡そ兄弟を憎む者は即殺人者なり。イオアン一書三の十五汝は剣を抜かざらん歐打も加へざらん兄弟の体は傷も負はせざらんさりながら汝の心は憎悪の念あらば此一念の爲は汝は殺人者とせられん。夫丈は汝は神の前は有罪者とならん兄弟は生存るも汝は全く殺害者たり汝は憎悪む所の者を最早心よ於て殺せりされば革新せよ己を潔めよもし汝等の家は蛇蝎の潜入るあらば汝等は其住所を淨め安じて居るを得んが爲は幾ばく盡力するか汝等は人を大に怒り此怒を己れに留めて其心は舊染ますると幾次なるか。夫丈汝等はは憎悪あり夫丈蛇と蝎とあるなり。さらば汝等

は何故神の家即己の心をこれより潔むるは盡力せざるか。汝等は「我等は負ある者を我等免すが如く」といふ。汝等は其の如く行狀せよ。我等の負を免し給へ」と固く信じていはんが爲なり。我等は負なくして此世に生存する。とわたしはず。さりながら其中或は大なる罪あり、これは洗滌よりして洗はるべく汝等の常は避けんを要するものなり。又或は日々罪あり、人はこれを免れて生存すると能はず。故にこれが爲は此の日々の請願とこれに副ふ所の條件とは必ず緊要なり。表信者聖マクシム曰く神に於て生活する者と生活は緊要の糧たる神を以て養はるゝ者とは神の寛容は大量に充たさるゝなり。故に彼は他の己れに對する悉くの不義を大量に忍耐し且これを免して自らも人と

同じく日々犯せる罪の免しを神より願ふ時は神の我れより對するを我れの自ら他より對するが如くならんを祈願し謙遜なる勇氣をもて左の如く呼でいはん曰く「我等より負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ」もし彼は他の己れより對して罪を犯したる者より負を免す如く己れも神より負ふ所の負を神より免されんを願ふならば神は其の免す所の者より公平より免すが如く彼も其の己れより遭遇する所の事より對し公平なる者となり己れより對して罪を犯したる者を免さんと疑ふ其の己を傷心せしめたる者の爲より或る記憶を心に印するを自ら許さるるなりこれ其の己を凌辱しめたる者より對し心より於て己を人性より絶つも己を神より絶たざらんが爲なり神が我等より對するの慈愛は

我等が人々より對するの深切と相準するなりされば神の我れより對する言ふ可らざる寛容は我等他の手段を以てはこれをうくると能はざるなり神は我等をして先づ相互より誠實なる和睦を建てしめんとを欲す、これ其の神の前より罪を犯す所の者といかよ相和すべきと彼等が多くこの怖るべき罪をいかよ免すべきとを我等より學ばんが爲よりあらず我等をして己を情慾より潔めしめんが爲なり且かくの如くして己を其の願ふ所の恩寵の性質と心情より於て相適合するものとならしめんが爲なり誰かかくの如きの心情を有するならば其者の心より己を神より分離して神の恩恵の己れよりそくを礙へる中壁はあらざるべし、
福音書第五章曰くけだし我等は洗禮の後も罪を犯すより主は

我等の罪を我等も赦すと我等も他も赦すが如くし給はんとを祈禱するを命すけだし我等もし怨を懐くならば主は我等も赦さざるなり神は我等を立て、標準とするものゝ如しけだし我等の他と行爲するが如く主も其の如く我等と行爲し給へばなり。

ソルンの大主教シメオン曰く神の福音の全旨と全力とは此も存すけだし我等の不法と罪とを我等も赦されん爲す神即言は地も降り人体を藉りて其血を流したればなり罪の免されんが爲す神なる機密は主もよめて設立せられたり彼は此が爲す自らすべてを爲し給へりされば我等も促すものはたゞ我等も他も免すとの一事あるのみなり故に法を示していへらく「宥せさらば汝等も宥されん」ルカ六の三十七又罪

を犯す者を日も幾回赦すべきや七次まで赦すべきやと問へるペートルは答へて七十も七を乗すべし即間断なく免すべしとの給へりかくの如く主は祈禱する者を立て、祈禱の目的を達するの決定者となしぬけだし彼れもし赦さば彼も自ら赦されんもし自ら免さば己れも免されん自ら免したる如く己れも其の如く免されん兄弟も爲し、所のものは我等を造りし者も昇らんけだし彼も神の像あればなりさて我等は相互に性も於て皆相等うして皆同じく神の僕たり神の前には人皆多く罪を犯せども相互に罪を犯すとは多からずさりながら人々も赦して神より赦を賜はるならば此の多からざるものを免して最も多きものをうくるなり。

我等は負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ

主教 テイホン 曰く「我等の負を我等は免し給へ」こゝは負とは罪を指す即
神の法は反對なる言と行と思とを指すなり故に聖なるルカは其福音
に於て「我等の罪を免し給へ」ルカ十一の四と書しぬけだし罪を負と名
づくるは府民にこれ有る如く負は其の負ふ者も債主も返済するの義
務を負はしめもし負債者として負を返さざる時は獄に投られ負を
返さざる間は拘留せらるゝ如く罪も神の義は賠償の義務を我等も
負はしめ「けだしすべての罪は神の義は戻る」もし賠償すべきものを有
たざる時は我等を永遠の獄に投するよる此等の負を自ら己れの方
よ由りて償却するとは我等も能はざるなりそれが爲にハリストスの
功德と神の仁慈とを越り就くは我等此負を無報に免されんが爲なり

故に我等は此事を神に願ひて「我等の負を我等は免し給へ」といふなり
かくの如く「我等の負を我等は免し給へ」と願ふはこれよ由りて我等た
いよ己の爲に祈るべきのみならず相互に祈るべきと相互に罪の赦
しを願ふべきとを示さるゝなり「我等の負を我等は免し給へ」とい
る此言はこれよ由りて最聖なる者も罪を犯すとそれを爲に自ら罪
の赦しを願ふを要するとを明白に示さるゝなり録していふが如し
曰く「此が爲に即罪の赦しを得るが爲に諸の義人は宜き時よ於て汝も
祈らんとす」聖詠卅一の六よさて此の祈禱は諸聖者の祈禱なりけだし誰
か眞實な心より神を父と稱ふるならば其者は聖者となるべく神の子
となるべく神の靈をして心よ居らしむべしさればもろく信實なる

我等は負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ 二百五十九

者は其の靈より呼んで「アウワ」父よといはんとす（ガラテヤ四の六）さて此處は聖者と關係するより罪といふも同意と偏執とより起る所のものをいふよりたどへ勉むるといへども自ら己を護る能はざる所の如き聖者の固より知らざる所のものをいふよりはわらざるなり、これ即己の弱さよりたどへ勉むるといへども自ら己を護る能はざる所の薄弱をいふなり。もろくの聖者は此の罪の爲に祈りていはんとす「父よ我等の罪を我等に赦し給へ」と。

我等は自ら唱へて「我等は負ある者を我等免すが如く」といふ、これ我等神は願ふて罪の赦しを受けんとするや自らも其近者も罪を免さんとす此言よて學ぶなり。彼は仁慈よりて我等も罪を赦す故に我等も彼

も傲ひ仁慈よりて其兄弟の罪を赦さるべからず。我等兄弟の罪を免す時は神も我等の罪を我等に赦すべく、もし我等免さずんば我等も神は赦さるとハリストスのこれに添ていへるが如し、曰く「汝等もし人よ其罪を免さば汝等の天の父は汝等も免さん。もし人よ其罪を免さざれば汝等の父も汝等も免さいらん」マトフェイ六の十四十五。

自ら罪中にあるも他の罪を免さる罪人等の中誰か祈禱して罪の免しを神に願はんと欲せば先づ自から他の罪を免さんを要す、此の如く既より自ら免して神に其恩寵をもて彼等を免し給はんとを願ひ罪人を陥るゝ罪の罰より己を救ひ給はんとを願ふを要す。けだし我等自ら他も免さる時は神も我等も罪を免さるればなり。さて我等も罪を免さ

れざる時は其よりて生ずるものは夫の債主の免さるる負債主これありし如く罪の爲の罰は非ずして何ぞやけだし彼を獄に投れて其債を拂ふまではこれを拘留する如く罪を免されざる所の罪人も神の裁判より永獄に投れらるゝなりされば罪人は負の爲に罰をうけて神の義に償はんとすさりながらこれは決して償ふをあたはざるなり永遠無限なる神を怒らし且辱かしめたるが爲に永遠無限なる罰を報ゆるは當然なりけだし神の義は悔改めざる罪人の適當なる罰をうけんを要すればなりされども人は神の永遠の法を破りそれより神の無限なる威嚴を辱しめたるが爲に他の如何なる物を以ててもこれを償ふあたはざるべくして永遠の罰と苦とあるのみなり然れども

悔改めて罪を行ふを止め罪の爲に哀痛して救を願ふ所の者より神より罪を免さるゝはこれたゞ神の唯一の憐憫よりハリストスの功德の爲に神はこれが爲に凡て悔改めてハリストスを信する者は罪の赦しを與ふるを自ら己の言にて約束し給へり此の神の憐憫は百二の聖詠に於てあらはさるゝが如し曰く『我が靈や主を讃揚げよ』

『さりながら悔改めてハリストスの苦と死との爲に罪の赦しをうけんと欲する者は必ず他の罪を免すべしけだし罪を免すとの無き處は眞實の悔改も無く眞實の悔改の無き處はハリストスの功德も位地を有たざるなりハリストスの功德の位地を有たざる處は罪を免すとある無く罪を免すとの無き處は罰あるべく罪の爲に地獄に於て

永遠の苦みあるべし故に罪人は罪を免されざる時は自ら罪を免すを
欲せざるが如く自らも免されざる時は神の前より人皆負ふ所の罪の爲
に鞠かるゝと負債の爲めは負債者の鞠かるゝが如くならん蓋し贖ふ
べきものを有たざるより永死をもてこれを償はんとす故に悔改め
て赦を得んと欲する者は罪を離れて神の憐みに超り謙遜と悲哀とを
もて自ら神の前より罪を得たる者と承認めハリストスの流されたる血
の爲に赦しを願ふべし此血は諸の罪人の爲に流されたるものとして
もろくの罪を潔むるなり又彼は放蕩の子と同じく他の無法なる國
を棄てて悲哀と自ら己を貶しめるともて父に歸り己を不當なる者
として自ら地に俯伏し父の慈眼の前より呼んでいふべし曰く父よ我れ

天と汝の前より罪を獲たれば最早汝の子と稱さるゝと堪へず願くは我
を汝の傭人の一の如くなし給へ「ルカ十五の十八十九汝の獨生子の恩
寵と仁慈とより我を憐み給へ彼は衆人の爲にも亦我れ罪人の爲
にも其血を流して死せり彼の無罪なる苦と死との爲に我れ罪ある者
に赦して我が負を免し給へと此の如く改心して謙遜と悲哀とをもて
己の罪を認め憐みを願ふ所の者には在天の父より其の悉くの罪を免
さるゝと疑なしこれ其の何等の功德にも依るゝあらずして唯一の恩
寵に依るなりけだし罪人の爲に流されたる神の子の血は其の悉くの
負を免して自今記憶するなからんとを呼べばなりかくの如く罪人が
自ら天父の慈悲を認識するは猶夫の反歸したる放蕩の子が仁心なる

我等も負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ

父の慈悲を自ら認識めたる如し。在天の父はかくの如き罪人の己れも
投歸りたるを認むるや慈眼をもてかれを見る故に彼は其の憐む所と
ならんとす。されば彼は其自恣と遠離と放蕩なる生活との爲に父より
譴責をさくあらずしてたゞ仁心なる父の聲を聞かん、曰く「至美き服を
携來りて彼に衣せ其指を環をはめ其足に屨を穿かせよ、また肥たる體
を牽來りて幸れ我儕食して樂まん此の我が子は死して復生さうしな
ひて復得たる者なり」ルカ十五の廿二―廿四故にハリストスの言ふ如
く一の悔改むる罪人の爲に天よて喜びあらん同く七節。
『さりながら神より大なる憐みをうけたる罪人は自らも其近者も憐み
をあらはして彼れも其罪を赦さんを要す願くは福音經にある如く王

も千万金を負ふたる負債者が聞知れると同じきものを己れも聞知
るあらざらんを彼は王より憐みをうけて其友を憐むを欲せず王の
唯一の憐みより己が巨なる債を豁免されたれども其兄弟は小な
る債をも恕すを欲せざりきそれが爲に王の怒に觸れて重き負債を再
び己れも得たるのみならず更に譴責を蒙りぬ、曰く「惡しき臣よ汝ら我
れも願ひしよよりて我れ其の負債を悉く免せり、我がなんぢを憐みし
如く汝も亦友を憐むべきよあらずや、その主怒りて負債をみな償ふま
で彼を獄吏に付せり、若し汝等かの心より己の兄弟も其罪を赦さ
ざれば我が天の父も亦なんぢらも此の如く行ふべし」マトフェイ十八の
二十二―三十五

我等も負ある者を我等免すが如く我等の負を免し給へ 二百六十七

第六求望

我等を誘ふ導かす

テルトリアン曰く主は此の如く人を救ふべき祈禱(我々)を免し給へ。の増補として我々を誘ふ導かすといふをこれに加へ給へり。これ我々たゞ罪を免されんが爲に祈るべきのみならず罪を一切預め除かれんをも祈るべきを我々を教ふるなり。我々を誘ふ導かすとは誘惑者の爲に我々を誘ふ陥らしむるなかれといふ義なり。然れども我々はこれをもて神が人を誘ふ如く思爲すべからず。これたゞ神は我々の信仰を知らざるもの、如くこれを探知らんとの意味にあらざる。まづ我々の陥るを喜ぶとの意味にあらざるなり。けだし不知と悪意とは

魔鬼に属すればなり。神のアウラアムに子を献祭するを命せしは其の信仰を探知らんが爲にあらざる。これをあらはしめむが爲なり。即其の神の命をうくるや骨肉の親を神より貴しとなさずして神の命に順ふの模範を我々を示さしめんが爲なり。主は自ら魔鬼の爲に誘はるゝに放任し之をもてゝ誘惑を爲す者の長と其術に巧なる者の如何を示せり。其後主は「誘惑に陥らざるやう祈禱せよ」ルカ二十二の四十一といふや重ねて此を證明し給へり。門徒等は最早誘はれたりき。何となれば祈禱よりも寧ろ誘惑を欲ふて主を獨り主に祈禱るを棄てたればなり。祈禱の結文に「尙我々を兇惡より救ひ給へ」といふも誘惑に導く者の如何なるを説示して此れに符合せしむるなり。

聖キブリアン曰く主はまた祈禱に於て我等を誘ふ導かずといふべきを我等も命じ給ふ神の許あらずんば敵は我等も何も爲す能はざるを此の求望よて見はざるなりこれ上より權を與へられずんば敵は我等も對して我等を誘ふも何も爲す能はざるや我等の悉くの畏れと悉くの虔恭と注意とを神に向はしむべきが爲なり神の書は此事を證していへり曰く『ワビロンの王ナウホドノソル來りてイニルサラムを攻圍みしよ主は彼を其手よわたし給へり』ダニイル一の一二三されば我等も對して兇惡者も權を與へらるゝは我等の罪の爲なり録していふが如し曰く『イアコフを奪ひし者は誰ぞイズライリを擒よせし者は誰ぞ神よわらすやわれら彼も罪を犯し彼の途を歩むを欲せずして彼の法よ

逆はざり』イサイヤ四十二の二十四二十五又ソロモンが罪を犯して主の誠命と其途とより離れしやいふあり曰く『主はソロモンの敵を振はせり』列王紀略上十一の二十三それ我等も對して敵も此權を與へらるゝは二の理由よ依る、一は我等罪を行ふ時間ときの爲なり、一は試みらるゝ時榮ときを神よ歸せんが爲なりこれイオフも行はれたるものよ於て見るが如し神の自ら證する所よよるよ曰く『視よ彼の所有物を汝の手よ任かずたゞかれの身よふるゝなかれ』イオフ一の十二又主は福音經よある如く苦難の時よ當りていへり曰く『上より汝も賜ふよ非ざれば汝我れも對して一も權ある無し』イオアン十九の十二されば願くは我等は誘ふ陥らざらんが爲よ祈禱し此の如く祈禱するをもて己の薄弱と

己の無力とを固く信ずるを得ん、これ誰も自ら己を高ぶらず誰も驕傲
 と自負とよより或物を己れよ占有せず誰も自ら己れよ表信或は致命
 の榮を歸せざらんが爲なり、殊主は自ら我等よ謙遜を教へていへり。
 曰く「誘惑は陥らざらんが爲よ醒め且祈れ、心神は勇めども肉体は弱き
 なり」マルク十四の三十八、此の如く謙遜なる信認己が荏弱を認むるの
 信認を預めさへげてすべてを全く神よ托ぬるならば其の畏れと虔恭
 とをもて謙遜よして神よ請願する所のものは神の恩恵よよりて必ず
 賜はらん。

イコルサリムの聖キリール曰く主よ「我等を誘ふ導かざれ」と、これ主は全
 く誘はるゝ者とならざらんが爲よ祈禱すべきを我等よ教ふるかざり

ながら他の處よ於てはいふあり、曰く「誘はれざる者は知ると辨なし」(シ
 ラフ三十四の十)又言ふあり、「我が兄弟よ汝等各様の試誘よわは、此を
 もて大なる喜と爲せ」(イアコフの一)されば誘ふ導くとは思ふよ誘ふ
 溺没るゝの謂なるか、けだし誘は恰も過渡り難き流れよ似たるあり、故
 よ或者は誘ふ溺没れずしてこれを過るとたとへば或る練達なる游者
 の如く少しくもこれよ誘引し去られざるべしといへども、或者は此の
 如くならずして入りて溺没れん例へばイウダの如し彼は好貨の誘よ
 陥りて深潭を游渡らず途よ溺れて身体も靈魂も共よ亡びぬ。さりなが
 らペートルは主を諱むの誘よ陥りしかども入りて溺れず、かへりて勇
 ましく深潭を游渡りて誘より救はれたり、きなは汝は聞くべし他の所

よ於て完全よ達したる聖者の隊が誘より救はれし爲よ感謝をさへぐ
 るを曰く「神や爾は曾て我等を試み我等を鍊ると銀を鍊るが如し爾我
 等を網よ入れ鎖をもて我等の腰よ繋ぎ人を我等の首の上よ置き我等
 は曾て火と水の中よ入る唯爾は我等を引出して自由を賜へり」聖詠六
 十五の十一十二見るべし誘を過渡りて弱らざりしが爲彼等は如何よ
 勇ましく言居るを曰く「我等を引出して自由を賜へり」と自由よ入ると
 は即誘より救はるゝの謂なり。

ニスサの聖グリゴリイ曰く「我等を誘ふみちびかず」兄弟よ言ふ所の旨
 趣はいかなるか主は悪者我等が敵の惡の同じからざるよより多くの
 名をもてこれを名づけ種々様々よこれを稱す或は惡魔といひ(マトフニ

イ十三の三十九)或はワリゼウル(同十の二十五)或は財貨(同六の二十
 四)或は斯世の君(イオアン十四の三十)或は殺人者(同八の四十四)或は誑
 者又誑の父(同上)といふの類是なり故よ此の誘といふもけだし彼を稱
 する名稱の一ならん言ふ所の文法も亦我が此の如き推考を證すけだ
 し主は「我等を誘ふ導かず」といへる後兇惡より救はるゝの願をこれよ
 添へ彼此二者をもて同一の事を示すものゝ如くいへばなりもし誰か
 誘よ入らずんば其者は必ず兇惡者の權の外よあるべし然れども誘よ
 入る者は必ず兇惡者の權よ属すされば誘と兇惡とは意義よ於て同一
 なりさて祈禱のかくの如き教導は我等よ何を訓示するかこれ世よ於
 て窺はるゝものいはゆる「世は擧て惡よ服す」イオアン一書五の十九と

いづる者の外に立つべきを訓示するなり。外に誘ふ陥るゝ兇悪者の權
 の外に立たんと欲する者は全く此世より脱せんを要す。けだし敵が其
 詭譎なる釣釣に世の誘惑を掛くると恰も誘餌をかくる如くしてこれ
 を見る者の目前に張り以て其慾望を起さしむるとあらずんば靈魂は
 誘ふ觸るゝとあらざるべければなり。さりながら此の意味は又他の例
 より見て見ば我等の爲によく明白ならん。海は波の起るよりよりて
 しばし人の爲に怖るゝ所となる。されどもこれより遠ざかりて居る
 者の爲には然らず。火は燒盡す。されどもたゞ其の火中に置かれたる物
 の爲なり。戦は恐るべし。されどもたゞ軍隊の中にある者の爲なり。戦
 於て遇ふ所の難を避けんと願ふ者は出戦ふの已むを得ざるゝ陥らざ

らんとを祈る。火を恐るゝ者は火中よりあらざらんとを祈る。海を畏るゝ
 者は出て航海するの要あらざらんとを祈る。此の如く兇悪者の襲撃を
 懼るゝ者も兇悪者の權中よりあらざらんとを祈るなり。即世の空虚と諸
 欲との爲に累はされざらんとを祈るなり。けだし世は悪に屬して誘ふ
 引入るゝ諸の端緒は世の事物に含まるゝが故に誘ふ陥らざらんとを祈
 る者の願ふ所は他にあらず。世の誘惑より引去られざらんとを願ふなり。
 けだし此を避くる者は釣釣を匿す所の敵の誘餌を越えこれを己れより
 引かざらん。これを呑みて漁夫の權中より落ちるを免れんが爲なり。
 聖金口曰く「我等を誘ふ導かず」ことより救世主は我等より苦行(患難の忍耐)
 の辞すべからざると任意にこれより急るべからざることゝを教へて

明は我等の無なるを證し驕傲を貶むるなりけだしかくの如くなれば
 我等の爲は勝利はいよく赫々くべく魔鬼の爲は敗北は益々甚しか
 るべければなりもし我等戦ふ引入られしなば勇氣よして立つべしさ
 れどもし此は呼ばるゝなくんば平安よして苦行の時を待つべし己を
 虚誇らざる者となし勇氣なるものとなさんが爲なり。
 又曰く「我等を誘ふみちびかず」實は我等は魔鬼より多くの患害をうけ
 又或は陽は辱しめ或は陰は姦計を運らす所の人々よりも多くこれを
 うくるなり身体も時としては靈魂は逆ひて大害を被らしむるとあり
 又時としては種々の病まかりて我等は憂愁と困苦とを致すとあり
 故に多くして且種々なる災難は多くの方面より我等に落來るよより

我等はすべて此等より救はれんとを神は願ふべきを教へらるゝなり
 けだし彼を禁する時は諸の動亂は息み暴風は平に復り辱められたる
 兇惡者は遠ざかると會て人々を棄て遠ざかりて豚に入りし如くなる
 べし且命令なくしては此だも爲すを敢てせざりしが如くなるべきよ
 りるなり「マトフェイ八の三十一」さて豚だも權を有せざる者はいかよ
 して神は保護せらるゝ人々を占領するを得んや。
 聖カシアン曰く此の時も當て重要なる疑問の起るありもし我等は誘
 りかゝらざらんを祈るならばいかよして德行は聖書に要する如く
 なる堅固をあらはすを得ん聖書にいへらく「誘はれざる者は知ると尋
 し」シラフ三十四の十「又いふあり」試誘を忍び受る人は福なり「イアコフ

一の十二故「我等を誘ふみちびかず」てふ祈禱の言はこれ即我等を何時も誘はるゝ者とならしむべからずとの意はあらずして我等を誘ふ勝たるゝ者とならしむべからずとの義なり。イオフは誘れたりされども誘ふ陥らざりきけだし「神は背きて愚なるをいはざりき」イオフ一の二十二誘者の誘はんと欲したる潰神の事をもて口を汚さざりき。アウラアムも誘はれたり又イオシフも誘はれたりされども彼も此も誘ふ陥らざりきけだし誘者の旨を一行はざりければなり。

福アウグスティン曰く神は自ら人を誘ふみちびかず然れども其最深奥なる意思はよりかの自ら己の助を奪ふ者を誘ふみちびかるゝは放任するなり何となれば彼はそれと相當すればなり。さりながら神はまた

顯然たる理由に依り或者をすて、誘ふみちびかるゝは放任すべきものゝ爲すとありされば或は誘ふみちびかるゝあり或は誘はるゝあるなり誘なくんば誰も自ら練達なるものとなるとあたはざるなり録する所の如し、曰く「誘はれざる者は知ると辨し」シラソ三十四の十又他をも練達なるものとならしむると能はざるなり使徒のいふが如し、曰く「我が誘の我の身はありしを汝等は卑めず」ガラタイヤ四の十四けだし使徒は肉体によりて生じたる試誘の爲に彼等の使徒に對する愛を絶たざりしを見るや彼等の幾ばく堅固なりしを此によりて知り得たりしなりされども我等はもろくの試誘の先は神は知られてあるなり何となれば神はすべてを事件に先だちて知ればなり録していへり曰く

「汝は預言者又は夢みる者の言ふ聽従ふなかれ、そは汝等の主神は汝等の心を盡し精神を盡して汝等の主神を愛するや否やを知らんとてかく汝等を試み給へばなり」復傳律令十三の三。さてこゝは知らんとててふ言は汝等も知らしめんとてといふ言は代用したるなり、これ猶我等或日を稱して喜ばしき日といふが如し、けだし彼は我等を喜ばしきものとなせばなり、又我等は寒冷の日を慵き日と名づく、何となれば彼は我等を慵きものとなせばなり、此の如き言法は多くこれあり、これ平常の談話に於ても學者の談話に於ても又聖書に於ても見る所なり、異端者等は何等の理解もなく汝等の主神は汝等を試むてふ言を神も不知を歸するものゝ如く見做してこれを舊約より除かんとす、これ福音經

に録する所を知らざるゝ坐るなり、福音經に主の事をいふて曰く「彼を試みて此を言へるなり蓋其の爲さんとする所をば自ら知り給へり」イオアン六の六。もし主は其の試みる所の者の心を知りしならば彼を試みて何を知らんと欲するか、かくの如く爲しゝはこれ一は其の試みらるゝ者の自ら己を知らんが爲、又一は此の如く多くの民が一も食ふべきものなしと思ひし時主の手より若干の麵包を飽くを得たりしを見て己の無望を罰せんが爲なるを疑なきなり、されば我等の祈るは誘はれざらんが爲、あらずして誘は陥らざらんが爲なり、けだし例へば人あり火にて試みられざる可らざるゝ定められて祈禱するは火の自己を觸れざらんが爲、あらずして燒盡されざ

らんが爲なる如し。土器を試むるは火爐として義人を試むるは災難なり。シラフ二十七の六。イオシフは淫奔の誘惑にて誘はれたり。然れども誘ふ陥らざりき。又スサンナも誘はれたり。然れども誘ふ陥らざりき。其他男となく女となく多く誘はれたるあり。然れどもこれ陥らざりき。イオフは特ニ然リ。サタナはイオフを試みんと請ひし所のものをもて多くの人を誘惑す。さりながら福音經にもこれと同様の誘を録さる。か曰く「視よサタナは汝等を麥の如く簸はんことを求めり」ルカ二十二の三十一。それサタナの人を誘ふ何の權も有たざるとは此等よりて見らるゝなり。さればもし彼は誘ふならば神の任縦よりて誘ふなり。さて神の任縦は或は人々を罪故罰するが爲。これあり。或は人々を

救へて練達を得せしむるが爲。これあり。然れども誰かいかなる誘ふ陥らんも其誘ふ大なる差異あり。主を賣りしイウダの陥りし誘はべし。トルの畏れよりハリストス主を諱みし時。陥りし誘と同じからず。さりながら誘の如何を問はずすべての誘の爲。法の一なるとは使徒の書なる。如し曰く「神は信なる者なり。汝曹の誘はるゝと其力も過ぐるを容さず。乃 誘ふそへて逃るべき途を備へん。汝曹耐忍ぶを得んが爲なり」コリント前十の十三。使徒は此の言をもて誘はれざらんが爲。祈禱すべきよ。あらずして誘ふ陥らざらんが爲。祈禱すべき所以を明し示すなり。我等の耐忍ぶ能はざる程のもの。我等と遭遇する時は我等誘ふ陥るものとならん。さりながら人の陥りて亡ぶる所の誘惑はい

かゝる危険からんも暫時の物に於ての幸又は不幸の原因して生ずるものなるより、暫時の物に戀々たらざる者は決して其物の重さより碎挫がれざるなり。

又曰くイオフの書を読みよ言ふあり曰く「人の世に居るは誘ふあらずや」「イオフ七の二」さて「我等を誘ふ導かず」といひて何事を祈るか、これ何事なるか、汝等宜く聴くべし使徒イアコフ曰く「誘はるゝ時誰も神は我をいざなふといふなかれ」「一」の十三誰か誘惑せられて罪に陥り魔鬼に従ふらばこは悪し誘はるゝなり使徒は此の意味にて神は何人をも誘はずといふなり、さりながら試と名づけらるゝ他の誘のあるあり、此事を録していふあり曰く「汝等の主神を愛するや否やを知らんとて主

神は汝等を試む」と此の知らんとてといふは汝等よ知らしめんとてといふと同じ、けだし神は自らこれを知り給へばなり、或人の誘惑せられて陥りし如くなる誘を以ては神は誰をも誘はざるなり、さりながら神は高上よして知る可らざる意見より、或者を棄つるとあり、されば或者を棄つる時は誘惑者は其者よ何を爲し得べきを發見さん、けだし、ある場合に於ては彼は最早抵抗者を逢へずして順良しく聽従者を神の棄てたる者よ於て見んとすればなり、故に神の我等を棄つるなからんが爲に我等は祈禱して「我等を誘ふ導かず」といふなり、使徒イアコフ又曰く「人おのゝ己の慾に引かれ餌せられて誘はるゝなり、慾已よ孕みて罪を生み罪すで成りて死をうむ」「一」の十四、十五、これ使徒は我等

何を教ふるか己の慾と戦ふを教ふるなり。聖洗よりて罪は悉く赦
 さる然れども慾の存るは汝等更ニ生れてこれと戦を作さんが爲な
 り。衝突は汝等の内部ニ存す。外部の敵を恐るゝ及ばず己れニ克つべ
 し。さらば世は制服せられん。外部の誘惑者即魔鬼と魔鬼の使とは汝
 何を爲し得んや。例へば誰なりとも汝を引誘して其の爲す所の悪事
 傾かしめんが爲ニ汝ニ或る利益を呈さん。何の時か汝は自己ニ於て
 貪慾ニ位地を興へざらんや。さりながらもし汝は自己ニ於て貪慾ニ位
 地を興ふる時は利を見て慾の望を燃し罪なる食物の羅の爲ニ捉はれ
 ん。されども汝は貪慾ニ聽従はずんばその羅は汝の前ニ徒らニ張り
 置かれんのみ。又例へば誘惑者をして汝を誘はんが爲ニ最良なる婦人

を近づかしめよ。もし汝の内部ニ貞潔を愛する愛の樹立するあらば此
 の外部の誘惑ニ易く勝つを得て他の女の美しき餌にて汝を捉へし
 めず己の内部ニ於て其慾を倒すべし。汝は其の敵ニ接せずして己の慾
 を覺らん。彼處ニ覺れるをば内部ニ於て制服すべし。爾へよさらば必ず
 克たん。汝を更ニ生れしめたるは汝の審判者なり。彼が汝の爲ニ預め競
 争を設けたるは以て榮冠を備ふるなり。さりながら汝は彼を己の補助
 者となさずして彼は汝を棄つる時は汝の勝たるゝと疑無し。それが爲
 ニ汝は祈禱ニ於て「我等を誘ふ導かず」と呼ぶべきを教へらるゝなり。さ
 て審判者が怒りて或者をその慾ニ付したるは使徒のいへる如し。曰く
 「神は彼等を其心の慾ニ付せり」ローマーの二十四。いかよしてこれを付

ししや強ゆるを以てせずたい彼等を棄つるを以てせり。
 又曰く『我等を誘ふ導かず』既多く作爲したる罪は我等も免し給へ而
 して他のこれと同様なる罪も我等を陥らしむるなかれけだし誘の爲
 も克たる者は罪も陥るよよる使徒イアコフ言ふ人の各々誘はるゝ
 は己の慾も引かれて誘はるゝなり慾すでも孕みて罪を生じ汝は慾も
 引かれざらんを欲せばこれも同ずると勿れ彼は何を以ても孕まずた
 い汝よりて孕むなり同ずるはこれ即心も於て彼と共に寝ぬるなり。
 慾は起らば自らこれを拒ぐべしこれも随ふとなかれ彼は淫蕩なり敗
 壞なり醜辱なり汝を神より遠ざくるなり彼と同意懐抱するを自ら許
 すなかれこれより生まるゝ子孫の泣かざらんが爲なりけだし若し同

意するならば即彼を懐抱するならば彼は孕まんさりながら『慾すでも
 孕みて罪を生じ』汝は此を恐れざるか『罪すでも成りて死を生じ』せめて
 汝は死なりとも恐れよたとへ罪を恐れざるも罪が引誘する所のもの
 を恐れよ罪は甘くして死は苦し死は即人類至極の不幸なり人々は何
 物の爲も罪を犯すも死して此處もこれを棄つされども罪をば自ら携
 ふるなり金銀の爲も罪を犯すか此處もこれを棄つ他の所有の爲も罪
 を犯すか此處もこれを棄つ女の爲も罪を犯すか此處もこれを棄つさ
 れば何物の爲も罪を犯すといへども死して瞑目するや此處もすべて
 これを棄つるなりたい其物の爲も汝の多く作りたる罪は汝自らこれ
 を携へん。

表信者聖マクシム曰く此の求望を前述の求望と連ねて立てたるは我等は左の事を教ふるなり即誰か他の己れに對して罪を犯す所の者も中心より免すとなく其心をすべて他と對するの不滿より清らし近者と和するの光にて輝くものとなし以て神とあらはすとあらずんば彼は己の墜墮を潔むるの已むを得ざるも立てらるべく他と對して寛容なるものとなるを學ばんが爲に神の恩寵を奪はれて當然に兇惡者の誘ふ付さるゝなりさればこゝに誘といふは罪の法を名づくるなり原始人は世に存するやこれを有たざりき然して兇惡と名づけらるゝは魔鬼をいふ是れ即人を誘惑して許されたるものより引去り心靈の望みよて禁せられたるものも轉らしめ神の誠を破るゝよりて罪の法を人

性も混合せしめたる者なり人が恩寵によりて賜はりし不死を奪はれたるはその破滅の結果なり或は言を換へていへば誘とは靈魂の同意を引て肉体の欲も向はしむる力を名づけ然して兇惡とはかくの如き引誘の力を煽動する勢力ある原因をいふなりもし誰か己に負ある者も負を免さずんばたとへ祈禱も於て願ふといへども義なる裁判者は決して彼を兇惡より救はず却りて此の如く殘忍にして和睦を好まざるものをば棄てて罪の法も汚され兇惡者の克つ所となるまゝとせん

とす何ぞや此の如き者は無法なる欲即魔鬼の種たるものを清き人性の要求即神の創造したまへるものよりもなほ尙べはなり又これと同様此の如き者の肉欲も傾くをも神は支るをなさずしてかくの如きの

傾きよ徳源す勢力ある原因よりも彼を救はざるなり何ぞやかくの如
 き者は天性よ戻るの欲を天性よりもなほ尙ひ前者を愛慕して後者は
 知るだよ欲せざればなり然れども人は天性の要求よ随ひ何物か天性
 の法よして何物か欲の非虐なるを知らんを要す即其望の天性より離
 れたるよ由り輸入し來れるよて天性自然よ人よ存するよ非るは何物
 なるを知らんを要するなり且前者[天性の法]は人の天性の要求を満足
 せしむれば愛慕すべく後者[欲の非虐]は心の望より遠くこれを驅逐す
 べし其のものとより自ら純潔よして無玷なる所の天性はこれよ其望を
 伴はしめて智識の働をもてこれを保護すべく天性の法の要求せざる
 所のものは一もこれよ挿み入れざらんを要すかくの如く己の同性者

よ對して怒り又は如何なる分争をも自ら許さずして主の「祈禱をさ
 ぐる時は其の聞く所となるを致さん」さらば一事の爲よ神より二倍の
 恩寵をうくるを得ん即全心より己よ負ある者よ負を免したる一事の
 爲よ既よ己よ誘はれたる己の罪は免されて誘よ入らしめざると兇惡
 者の奴隸とならしめざるとよ由り保護せられて將來よ救はるよを得
 ん。

「故よ兇惡より救はれ誘よ陥らざらんを願はよ神よ依頼して己よ負
 ある者よ負を免さん」けだしもし人よ其罪を免さよれば我等の父も汝
 等よ其罪を免さよらん「マトフェイ六の十五」といへばなりさてかくの如
 くんば罪の赦しをうくるのみならず誘よ入るをも許されずして罪の

法を征服するを得ん又罪の父即兇惡なる蛇を世に勝てるハリストス
 主の指揮よりて蹂躪るを得ん彼は誠命の法をもて我等を鑑はしめ
 情欲を秩序に從はしめて我等の天性を復興し生命と睿智と認識と正
 義との糧なる彼れハリストスより向ふの飽かざる意志を我等より起さし
 め天父の旨を遵奉するより我等を諸神使と同勤者たらしめ己の品
 行を立つるより神に悦ばるゝ天上の生活を天使の如く現はさしむ
 るなり且やそれより天使に似るよりいよゝ我等を高めて神なる光
 の父より昇るの極點にみちびき聖神の恩寵を領るよりて我等を神性
 の關係者とならしめ此の恩寵の造成者即性にて父の子たる者を言難
 く衣被て神の諸子となるを得せしむるなり我等は彼よりて存し彼

よりて動き彼に於て生活するを得ん

「願くは我等の祈禱は恩寵より人を神性に近づかしむる此の奥妙不
 可思議の事より向ふを最終の目的より向ふが如くせん願くは獨生者の肉
 体より降りしは我等を如何なる者より如何なる者と爲すをわらはし仁
 慈者の大能なる右の手は罪の重量よりて最下の底に墮落したる我
 等を如何なる處よりいかなる處に引上すをわらはさん且や我等は祈
 禱の我等より遂げらるゝを實際よりわらはし我等の父とするは實に神に
 して兇惡者よりわらず即欲を以て常より我等を非道に壓制せんと欲し生
 り易へて死より引下すものよりはわらざるを自己の情況よりて知らしめて
 我等の爲りかくの如き救をかくも睿智をもて備へ給ひし者を殊に愛

さん、けだし此の有權者即神と魔鬼は各々彼を其身を委ぬる者、常は其の己れに属する者を授くるなり、即甲は彼を愛する者、永遠の生命を與へ乙は誘惑の働に甘んじて降服する者、死を飲ましむるなり。「聖書を按ずるに誘ふ二種あり、一は愉快なるもの、由りて起り一は哀しく且疲ましきもの、由りて起る、一は自由隨意的にして一は心ならずものなり、罪はこれ等よりて生ず、故に此等の誘ふ陥らざらんが爲祈禱に於て「我等を誘ふ導かず」といふべきを我等に教へ又誘惑に陥らざらんが爲に醒め且祈れ」馬太廿六の四十一」と言合め給ひし主の誠より従ひて祈禱すべきを我等に命せられたり、さて此等の誘ふは意はざる重辱を我等に被らしむるより、こは罪を愛する心を罰するの誅罰者なり、さればもし誰かこれを忍び受くるならば、特もし罪の釘にて緊く釘付されしは、あらざる者の中誰かこれを忍び受くるならば、大なるイヤコフが呼ぶ所の言は己にも適用すべきを見ん、曰く「我が兄弟よ汝曹各様の試誘に遇ふ時は、大なる喜びをもて之をうくべし、汝等の信の試みは忍耐を生せしむるを知るに因る」一、二、三、兇惡者はかくの如き二つの誘ふ導かんに爲る惡意をもて密に窺ふなり、甲の場合に於ては肉體の嗜好を種き且これを起すをもて、靈魂を誘ひ神を愛するの心情より離れしめんを計り而して乙の場合に於ては憂患と災難との重きに壓せられたる靈魂をたばかり説勸めて創造者より對し敢て不平の念を懷き不義を訴へしめんとす。

「されば我等は兇悪者の奸計を知りて自由なる誘ひの時よは神を愛するの心情より我等を離れしめざるを祈らんされども神が我等を心ならざる誘ひに遭遇するまゝに放任する時は勇氣よしてこれを忍耐せん天性(憂患の重きより)弱れる天性よりも天性を造れる造成者を尙ふをわらはさんが爲なりされば我等の主イエス Kristus の名を呼ぶ所の我等衆人は此世よ於ては兇悪者の誘惑する甘きよ引去らるるを免れ來世よ於ては彼處の苦みより救はれ一切の造物より父及び神と共に讚美せらるる我等の主ハリストスよ於て僅く其一部を獲はる言ふ可らざるの幸福よ關係する者となるを致すべし。福スエオフェイスラクト曰く誘ふ導かずとは即ち誘ふ引入られずの謂なりけ

だし我等の神よ祈るべきは我等よ誘ひを遣されざらんが爲よわらずしてこれを避けんが爲なりされどもしこれに遭遇する時は勇氣よしてこれを忍耐するを要す誘ひ二種ありこれを言ふを肝要なり一は自由なるもの例へば大酒殺人姦淫及び其他の諸の欲の如き是なりけだし我等は自ら自由よして此等の誘ひかゝればなり二は心ならざるもの例へば君主又は強者が我等を陥るゝ如きものは是なり我等は此の自由なる誘ひ即諸の欲を避け此より救はれんとを祈禱して「我等を導かず」といふべし言意は誘ひ即自由なる欲よ陥らしむるなかれとなり。又曰く我等は弱き人類なり故よ己を誘ひ陥らしむべからずされどももし誘ひに陥る時は其誘ひの我等を渦入まざらんと神が我等よ助けと

忍耐とを賜はらんことを祈るべし。けだし災難の淵に引入れらるゝはたゞ誘の爲に勝たれたる者のみよて誘に陥りしもこれに勝つ所の者は榮冠と名譽とをうくるなり。

ソルンの大主教シメオン曰く「我等を誘ふみちびかず」けだし怨恨を満て、常に我等を敵視する讒者は多く魔鬼よりも人々よりも身体よりも靈魂の不注意よりも来る所の誘は多ければなり。此等はすべて熱心よ苦戦する者をも迎へ又怠慢なる者をも迎へん。たゞ義人等のいざなはるゝ誘は試みて上進せしめ轉じて善とならしむるなり。義人等も忍耐を要す(エウレイ十の三十六)何となれば「心神は勇めども肉体は弱ければなり」(マトフェイ二十六の四十一)さて例へば兄弟を賤め或は辱かし

め或は彼に愛を蒙らしめ神に属するものを賤しめ或はこれを怒まする等かくの如きの誘より誰か免るゝを得るか故に我等は自ら赦し且怒するよより神と兄弟とに對して犯したる罪の赦を得んとを祈りつゝ誘に陥らざらんが爲にも祈るは當然なり。誰か義なる者なるべし。されども彼は自己の爲に敢てするあるべからず。けだし温順にして怒し且赦すはこれ即義なればなり。

主教ティホン曰く「誘は善に對しても或は惡に對しても我等は生ず善に對する誘は神によりてこれあり。太閤及び其他の諸聖人が試みられし者は是なり」神や我を試みて我が心を知り我を試みて我が念慮を知れよ」(聖詠百三十八の二十三)アウラムもかくの如く試みられたり(創世記

二十二章「こゝにいふ所のものはかゝる誘ふ事ゝあらず悪ふ對するの誘即誘惑をいふなり、これ或は魔鬼より起るあり、彼はあらゆる手段を盡して我等を捕へ誘ふて罪を導き我等を滅さんとす或は肉身より起るあり、彼は諸の情と慾をもて我等を打負かす或は又世俗より起るあり、彼は美觀と虚誇と誘引をもて我等を惡ふ慾となり、こゝにいふ所のものは此等の誘ふ事なり、神は善なれば誰をも誘はず、誘はるゝ時誰も神は我を誘ふといふなかれ蓋神は惡ふ誘はれず自らも人を誘はず即おのゝ己の欲を引かれ餌せられて誘はるゝなり」イアコフ一の十三、十四

「我等を誘ふ導かず」此言をもて我等は神に其恩寵をもて世俗と肉身と

魔鬼との誘より我等を守り給ふを祈らん且たとへ誘ふ陥るといへども我等は其の爲に勝たれず却りて克つてこれを制服するに助け給ふを願はん此より見れば神の助けなくんば我等は自ら無力にして且荏弱なると彰々なりもし我等自分にて誘ふ抵抗するを得ば此事に於て助けを願ふを我等に命せられざらんされば我等は其逢ふ所の誘を感ずるや直ちに神に祈禱してこれが爲に助けを願ふを此言よりて學ばん特に我等は自ら己の力を頼まずして神を頼むを此言よりて學ばんされば我等を誘ふ導かずと祈る時は我等自ら己を誘ふ付すべからざるなり聖金口曰く苦行を引入らるゝ時は勇ましく立つを要す、さりながらもしこれと呼ばれずんば静黙して苦行の時を待つべし虚

榮を願はずして勇氣をあらはさんが爲なり、

第七求望

尙我等を兇惡より救ひ給へ

聖キプリアン曰く最後祈禱の終りも我等が悉くの祈願と求望とを簡短よひあらはせる結文を附するなり、我等は終りも於て「尙我等を兇惡より救ひ給へ」といふ、知るべしこれ敵が此世も於て我等も對し謀る所のもろくの禍害を指すを、もし我等はこれより救ふの救者も神を有して神は我等の求望と祈願とより其助を我等も與へ給ふならば我等もは敵も對して信實なる且堅固なる保護あるあり、故も我等を兇惡より救ひ給へ」と言へば其後最早復た何も願ふも及ばざるべし、蓋我

等は兇惡も對して神の充分なる保護を願へばなり、而してかくの如きの保護を既に受くれば我等は最早安然なるべく魔鬼と世俗との悉くの奸計より防ぎ守らるゝなり、此世も於て神が保護者たる所の者は實際世も何の畏るゝものやある、

ニスサの聖グリゴリイ曰く我等は起ちて神もつげて我等を誘ふみちびかず即現生の災難も導かずして此世も勢力を有する兇惡より我等を救ひ給へといふ、これ我等ハリストス主の恩寵もよりてこれより救はるゝを得んが爲なり、

聖金口曰く此處も主は魔鬼を兇惡と名づけ彼も對して和す可らざる戰を作すべきを我等も命ず、これ彼の此の如くなるは天性も出づるも

あらざるをあらはさんが爲なりけだし惡は天性に係るよあらずして自由なればなりされども特は魔鬼を兇惡と名づくるは彼は集まる惡の非常多くして彼は我等の爲に何の辱めらるゝ所あらざるも我等は對して和す可らざる戦を開くが爲なるよよる故に救世主は我等を諸の兇惡より救ひ給へといはずして兇惡より救ひ給へと單數にていへりこれ我等時として近者より受る所の凌辱の爲に決して近者を怒らすして敵意をすべて万惡の源由者たる魔鬼に向はしむべきを我等は教ふるなり。

聖カシアン曰く終りよ言を續けていふ尙我等を兇惡より救ひ給へ」とこれ言意は我等魔鬼より誘はるゝと我等の力よ過るを許さず我等よ

耐忍ぶを得んが爲に誘と共逃るべき路をも備ひ給へ」コリンフ前十の十三となり。

福アウグスティン曰く尙我等を兇惡より救ひ給へ」これ同く前項の求望は属すけだし彼も此も同一の事を願ふものなればなり故に尙といへる接續詞を置かれたりこれ此の「我等を誘ふみちびかず尙我等を兇惡より救ひ給へ」といふ言は全く同一の意味をあらはすを示さんが爲なり何ぞや主は我等を兇惡より救へば誘ふ導かざるべく又我等を誘ふ導かずんば兇惡より救ふを以てなり。

「さりながら愛する所の者よ我等よは此の生涯に於て一の恐るべき誘のあるあり何ぞや他の誘よより陥るあらば自ら救を得可らんよしか

も其誘の爲は危き一陷り誘ふ服するものは是なり此の誘は恐るべし何
 となれば他の誘より受けし所の疵より痊さるべきを自ら奪ふよ
 る余は汝等の我言を了解せざるを知るさりながら汝等はよろしく聽
 て了解すべしとも誰か何の誘よか勝たれたりと假定せんよ良善なる
 格闘者といへども疵をうけん例へば人あり吝嗇の爲は勝れたりとせ
 ん彼はたゞへ良善なる格闘者なりとも隨意に私利を闘らんさりなが
 ら欲既は過ぎて罪は自ら認めらる故に彼は免し給へと祈禱すべしさ
 らば彼れもし自ら他は免すならば己れも直ち免さるゝなり或は
 誰か婦を見て慾を起しこれをもて喜ばんさりながら適時これに氣付
 きて慾念を鎮め罪を犯すに至らざりきされど我等は肉慾の樂みを許

容したるよより既は或る罪を犯しぬ故に免し給へと祈るべき緊要わ
 るなりされば此處に於ても彼は自ら他は免すならば己れも直ち免
 免さるゝなりすべて其他の誘の時も亦かくの如くなりん誰か他は
 免すや彼はいかなる誘の爲に墮きたりとも悔改めて神に向ひ免し給
 へと呼ぶならば直ち己れも免さるゝなりされど彼れもし他は免
 さずんば至小き犯罪といへども免されざらんこれぞ我が論及する所
 の恐るべく且害あるの誘よして此誘は惡の源なる兇惡者が宥免を知
 らずして仇を報すを要むるの惡意を我等の心種と得たる時よこれ
 ありされば『兇惡より我等を救ひ給へ』と言ふは我等特に此れより救は
 れんとを祈るなりけだし汝は他のすべての罪に於て免さるゝを得べ

からんを此れよよりて奪はるればなり汝はいかなる感情といかなる望みと行どよて罪を犯したりとももし他も救すあらば自らも悉くよ於て救をうけんさりながら視よ兇惡者は汝を報仇よ焚付けて救をうくべきを汝より奪ふのみならず祈禱よ於て「我等よ負あるものを我等免すが如く」と言ふの勇氣さへも奪はんとすされば汝は既よ此の勇氣を失ふ時はすべての罪は汝の爲よ残りて一も免されざらん。

「されば我が兄弟や視よ我が子や視よ神の子や視よ我れ汝等よ懇求す力のあらん限り己の心と戦ふべく己の心よ於て兇惡者と戦ふべし怒りが汝等よ起りて惡逆が汝等の心を蝕むを見る時は神よ祈るべし願くは神は汝等を此の誘よ勝者とならしめて汝等よ働く所の惡よ

り救ひ給はん外部の敵を姑く置きて内部の敵と開戦し且祈禱せよ主は近くして其助は備はりぬ呼べよさらば救ひ給はん。

又曰く「我等を誘よ導かず」といふよ續きて「尙我等を兇惡より救ひ給へ」といふ兇惡より救はれんを願ふ者は此言を以て兇惡の爲よ圍まるゝを證するなり故よ使徒はいへらく「光陰を重んずべしけだし時惡しければなり」エフェス五の十六。さりながら誰か生くるを望み長壽して幸福を見んと欲するか」といふ即凡そ肉を負ふ所の人よして其生活の諸日の惡しさよ當り誰か此を欲せざるものあるかもし此を欲するならば次よ言ふ所の事を行ふべし曰く「爾の舌を惡より汝の口を偽りの言より止めよ惡を避けて善を行ひ和平を尋ねて之よ從へよ」聖詠三十三の

十三—十五 汝はかくの如く行爲ふべし。さらば惡日を絶滅して『我等を兇惡より救ひ給へ』との言は汝も成らん。
 又曰く我等の祈るべきはたゞ我等誘ふよりて惡を引入られざらん事のみよわらず即第六の求望も於て願ふ所の事のみよわらずして既引入られたる所のものよりも救はるゝよありされば此の願として受けらるゝ時は我等の爲も危險なるものは最早も存せざるべく何等の誘も最早恐るゝも足らざらん。さりながら蛇の誘惑をもて一朝我等を擠陥れたるより以來耽欲の爲も圍まられたる此生涯も於て我等は何も期するあたはざるなり。然れども此願の何時か成るあらんを頼望むべし。これぞ見ざる所のものを待つ目的なる使徒のいふ如し。曰く

「望は見る時は望も非ず」ローマ八の二十四。然れども神の僕は尙此の生涯に於ても得らるべきの智慧も自ら失望す可らず。此智慧は神の啓示より我等が悟得たる如く避くべき所のものは最嚴重なる注意をもてこれを避け同く亦神の啓示より悟得たる如く願ふべき所のものは奮熱なる愛をもて願ふもあるなり。かくの如くなれば我等は死よりて死すべきの鞭をすべて己れより脱するや何を以ても破られざる万全の福樂も入るを賜はるゝなり。その初實はなほ此生涯も於ても見はるゝありてこれをうけんと。其の圓滿も至ては何時か彼處も於てうけん。
 福フエオフラクト曰く『尙我等を兇惡より救ひ給へ』けだし兇惡者は心な

らざる誘と自由なる誘とを多く蒙らしめんとす故に汝は心ならず人
 により誘を受くる時は此人をもて汝の誘の源因者と思ふなかれ兇惡者
 をもて源因者と爲すべしけだし彼は人を懲懲して汝に向て憤怒し且
 は狂亂せしむればなり
 又曰く兇惡なる人々より救ひ給へといはざるはけだし我等も惡を爲
 すは人々よあらず人々を挑撥て兇惡者が我等も亦彼等も惡を爲
 さしむるよよる故に我等の憎み且罰すべきは人々よあらずして惡鬼
 なり
 ソルンの大主教シメオン曰く尙我等を兇惡より救ひ給へけだし彼は
 汝と我等との敵として制す可らざるもの眠らずして惡を燃ゆる者な

ればなり彼は抵抗するの力は我等よあるなし何となれば彼は我等よ
 りも最銳利き天性を有ち狡猾くして眠るを知らず我等よ對して無敵
 の奸計を創設羅織つゝあればなりされば万物の造成者及び主宰よも
 し汝は此の魔鬼と其夥伴との主宰たるも亦猶諸天使と我等との主宰
 たる如くなるも汝は我等を取去らすんば誰かよく此れより救はれん
 や非物体よして且臆患り且嫉妬み及び全く奸惡なる者と戦ふ力は我
 等よ有らざるなり
 主教テホン曰く聖金口の教は依るよいへらく兇惡とは知るべし此處
 よては魔鬼を指すをけだし此處は我等も魔鬼と倦まざる戦を作すべ
 きを命じて魔鬼を兇惡と稱すればなりと彼の特よかく名づけらるゝ

は其の大なる惡の爲なり、けだし彼は我等より對て倦むす武装して身軀の上にも又心靈上にも諸の災難を我等より蒙らしむるを勉むると使徒の言ふ如くなればなり、曰く「擗節儆醒れ蓋汝曹の敵なる魔鬼は吼ゆる獅子の如く徧行りて呑むべきものを尋ね」ペートル前五の八、我等此言「兇惡より救へ」といふをもて天の父は祈るは父の自ら我等を彼より防護らんが爲なり、けだし我等自力より頼りては己を彼より守ること能はずればなり、終りて彼は我等の死時、際し特に誠信なる者より對して戦はんと欲するより我等を彼より守らんが爲及び幸福の終りを遂げたる後我等の靈魂を天の本國より取去らんが爲なり、又彼よりも彼よりも起る所の諸の災難よりも我等を救ひて其名を信する者より約し給へ

る永遠の福樂を我等より與へ給はんが爲なり、我等が救世主は此の「我等を兇惡より救ひ給へ」といへる言をもて我等を祈禱し賜まし祈禱よりりて彼より救はるべきを教ふ、金口いへらく敵を記憶せしむるは我等を苦行より準備せしめて我等より慚悔を截去るなり、我等を誘ふ導かずといひて我を導かずといはず又我等を兇惡より救ひ給へといひて我を救ひ給へといはざるはこれ我等相互に祈禱して相互に神より助けと保護と救援とを願ふべきを我等より教へ且勸むるなり。

頌 讚

蓋し國と力と榮は世々汝のものなり、阿民。

聖金口曰く主は敵を憶起さしめて我等を兇惡より救ひ給へといふ言

よより我等を大に警戒し我等がもろくの不注意を裁去りたる後我等よ王をあらはす即我等其の權下よりて戰を爲しわづる者より大よして且力あるの王をあらはすはこれ我等を遠く鼓舞すなり救世主いへらく「蓋し國と力と榮は汝のものなり」されば國は彼のものならば誰をも恐るべきよあらすけだし誰も彼を抵抗するとなく又誰も彼と共に權を分たさればなりけだし救世主は「國は汝のものなり」といふこれ我等の敵は一見したる所よては神の任縱より尙抵抗するが如くなるも神よ從屬するを示すなりけだし彼はたとへ罰せられたる且は斥けられたる者なりといへどもなほ僕の數よわり故よ先づ上より權をうけずんば僕の一をも攻撃するを敢てせざればなりとも我れ何

ぞ僕の一といはんや救世主が自ら命令せざる間は隙をだよ攻撃するを敢てせざりき上より權と力とをうけざる間は牝羊と牡牛(イオフの)の群をさへ攻撃するを敢てせざりき故よ汝は最薄弱なる者といへども汝よよりて悉くの榮譽なる事業を易く成就せしむるの王を有するよより勇氣なるべし此王は汝よ及ばんとするの惡より汝を脱れしむるを得るのみならず更よ汝を榮譽なる者となし又有名なる者ともなし得べし榮といふ言はこれを示すなりけだし彼の力の大なる如く彼の榮も言得べからざるものよして全く無限無終なればなり汝見るか救世主は到處よ功勞者を堅め且勵まし給ふを
又曰く主は祈禱の終りよ「けだし國と力と榮は汝のものなり」といひて

神の國と力と榮とをあらはせり其意いふ我れ此を汝願ふは汝は一切の王よして永遠の威權を有ち何の欲する所あるもすべて遂成すを得べくして奪ふ可らざる榮を領有するを知ればなりと。

福フエオフライクト曰く此處は我等を獎勵するなり。けだし我等の父は光榮よして勇毅の王なるより我等は堅き信仰の助けをもて必ず兇惡よ勝ちて最後榮をうけん。即王が衆人よ其行に依りて報いんとする時よろけん。

ソルンのシメオン曰く我等は薄弱なり父よ汝は自ら我等を兇惡より救ひ給へ。けだし國と力と榮は汝のものなり。アミン。汝主宰及び主諸天使の上も長たる者よ。汝が王治むる所のものを誰か敢て攻撃凌辱す

るか誰か汝の力よ抗するか誰も必ず敢てせざるなり。けだし汝はもろくを造りし如く亦もろくを守ればなり。或は誰か汝の榮よ反對して立つか。或はすべての邊隅に至るまで盡く包括せざるなき。汝の榮を誰か敢て減らさんとするか。けだし天と地とは其榮よ充たされて其榮は天と天使の造らるより先きよ。汝と共に存したればなり。汝は獨り長存して永遠なり。されば汝父と子と聖神の榮は國と力と向く世々よ存す。アミン。とは言意は汝の王たることと力あることと世々よ讚榮せらるゝこととは眞に信認せらるべくして全く疑ふべき無しとなり。

イエルサラムの聖キリル曰く祈禱を行ひし後汝はアミンといふ。アミンとは成る可し。この義なり。此言をもて神より與へられし祈禱よ於て

いふ所のものを心よ銘するなり。主教テイホン曰く「けだし國と力と云々」此言は主の新禱の收結なり、これをもて仁慈なる在天の父よ對する希望と勇氣とを示す、汝は万物の上よ支配して一切は其の權よ服従す、汝は万物よ越て最勇敢なり、誰も汝よ反對して立つと能はず、故よ我等は汝の名を榮せん、蓋不幸なる我等罪人は願ふ所のものを汝よりうくるなり、故よ我等は此處よ於ても中心より汝よ感謝し、特よ來生よ於ては汝よ選ばれし者等と共に汝の名を榮せん、聖金曰いふ我等が從屬する所の王を憶はしむるは我等よ勇氣を興へて我等を起すなり、且其王はあらゆるものより最大有力なるをわらはしめていへらく國と力と榮は汝のものなりと、故よ國は彼のもの

のならば誰をも恐るべきよわらず、けだし誰も彼の聖徳よ對立して彼の權よ抗するも能はさればなり、國は汝のもめなりといふはこれ我等の反對者も神の任縱よより抵抗するとはいへども、同く亦其國よ從屬するを示す、けだし彼はたとへ擯斥されたる且は神を怒らすものなり、といふども同く亦僕の數よあり、故よ先づ上より免許をうくるなくんば誰よ向ても攻撃するを敢てせず、且いかなる人をも攻撃せざるのみならず、神の任縱なくんば豕牝羊、牡牛よさへも入るも能はざるなり、故よ汝はたとへ薄弱なりといへども、汝よ由りて必ずすべてを易く爲し得べからしむるの王を有するよぞ勇氣なるべし、正教宗門よ曰く此の讚詞は分ちて兩部と爲す、第一初の呼起即我等の

父よ云々は我等父より願ふ所よりは疑なくうくべしとの保証を預め與ふる如く此の讃詞も祈る所のものをうくべきを我等も確信せしむるなり何となれば全世界は我等の父に屬して父はこれを支配しあらゆる造物は彼に服従すればなり天に在りても地にあつても何物も反對する能はざるの力と榮とは彼に屬す故に我等が信と望とをもて祈る所のものは彼すべてこれを遂げしむるを得るなり而してこれ他の何の故にもあらずしてなり其の永久に存する自己の榮の爲なるとは榮は世々よてよ言よて證示する如し讃詞の第二は「アメン」云々一言よあり我等は此言をもて一は信と望とをもて祈る所のものはすべて其の願の如く成らんことを懇願し一は神の旨を備ひて

祈る所の事はすべて我等に疑なく成るべしとの確信を證するなり使徒の言ふ如し曰く「我等神の旨よよりて求むる時は彼は必ず我等に聽かんこれ我等彼に向ひて篤く信する所なり凡て我が求むる所を彼の聽くを知らば我が求むる所を彼より受くべきとをも知るなり」イオア
ン一書五の四十五

基督教訓蒙よ曰く主の新膺は此讃詞を附合するは第一我等は在天の父より憐みをうくるを願ふと同時に適當なる尊敬を彼に施さんが爲なり第二彼の永遠の國と力と榮との事を思ひ我等が願ふ所のものを彼は必ず賜はんとの希望をます一堅く立てんが爲なり何となればこれ彼の權ありて彼の榮に屬すればなりさて眞に或は成るべしと

の義なる「アミン」てふ言を讃詞に附るは此祈禱を信と疑無きをもて
献すべきをあらはす使徒イアコフの教ふる如し曰く「毫も疑ふとなく
信をもて求むべし」イアコフの六。

收 結

テロリアン曰く主の祈禱は簡短なれども預言者福音書及び使徒の
言及び主の說話と其譬喩と其誠命とこれに關係すると幾何なるか、こ
れと共に此祈禱は我等をして本分を守る者とならしむると亦幾何な
るか神を敬ふとは我等の父てふ言に於てあらはし行をもて信を證す
るとは願くは爾の名は聖とせられといふに於てあらはし神に服従を
表するとは願くは汝の言は行はれんといひ彼に於て生活を求むるを

は我等が糧を與へ給へといふに於てあらはし負を免ざるの願に於
ては罪を承認むるをあらはし誘惑より警戒するに於ては上より保護
と庇蔭を求むるをあらはすこれ皆獨り神は我等に祈禱せしめんと
で其の欲する如くこれを我等に教ふるを得たる者なり故に神の立て
給へる此の最度恭なる祈禱は神の精神にて活動し我等の心も我等の
口より出づると當初に此を授けられし時神の口より出づるが如くし
て此の特典より天より昇り子に教へられしものをもて父の愛情を訴
へんとするなりさりながら人間の窮乏を洞察する主はかくの如き祈
禱の規則を授けたる後特に命じて「願へよ然らば汝曹も與へられん」ル
カ十一の九と宣ひしのみならず人各々己の境遇より法をもて定め

られたる此祈禱を預め基礎の如く置て祈願するの必要を多く有する
 よより流れ行く生活の要求に應じて此の祈禱の求望は他の求望をも
 添るを許し給へり但し我等は誠命より遠ざかるだけ我等の求望も神
 の耳より遠ざかるよより之を免れん爲に誠命を記憶してこれを實行
 するの條件をこれに附されたり誠命を行ふは我等が祈禱の爲に天よ
 昇るの跡を啓くものよして其の至要なるものは互に分争不平ある所
 の兄弟と預め和を講せずば主の祭臺に就かざるよあるなり(マトエライ
 五の二十三)それ兄弟と和平を欠きて和平の神に就かんとはいかんぞ
 實際に爲し得べきならんや兄弟の負を釋さずして己が負の免されん
 とをいかにして願ふべけんや兄弟を怒る者はいかにして父に悦ばる

べけんや
 聖キリスト曰く至愛なる兄弟よ主が其の師たる權をもて我等が悉
 くの願を教の言中より簡短に合して我等よかくの如き祈禱を授け給ひ
 しは何ぞ奇むよ足らんやそも神の言なる我等の主イエスハリスト
 スが万民の爲に來りて學者も不學者も共に集め男女老幼の別なく衆
 人の爲に救の誠命を授くるや其の悉くの誠命を貴重してこれを簡約
 よなし給ひしはこれ學ぶ者の記憶を天上の學問の爲に苦めらるるも
 のとならしめず通常の信仰の爲に緊要なるものを直ちよ學び得させ
 んが爲なり
 されば主はたゞ言を以てのみならず行を以ても我等に祈禱するを教

給へり何となれば主は自らしばし神は祈禱と懇求とをさるるけて
 我等も亦同く其の如く行ふべきを示したればなりかくの如く主の
 事を録していへらく『イイヌス野は退きて騰れり』ルカ五の十六又いへ
 らく『祈禱の爲よ山に登りて終夜神を祈れり』ルカ六の十二それ主は無
 罪なりしも祈禱もしなればまして諸の罪人は祈禱せずして可なり
 や彼は終夜眠らずして間断なく祈禱を行ひしならばまして我等は救
 へられたる祈禱の爲よ夜中敬醒すべきはあらずや主の祈禱して願ひ
 しばばの爲よあらずしてけだし無罪なるものは己の爲よ何を祈求し
 せけんや我等の罪の爲よとは其の自ら言明すが如し『』
 びて曰く『視よサタナ汝等を麥の如く簸はんを求めり然れども汝の

信仰の匿ざるやう我汝の爲よ祈れり』ルカ二十二の三十一三十二主は
 其後衆人の爲よ父を祈りて曰く『我はたゞ彼等の爲よ祈るよ非ず彼等
 の言よよりて我を信する者の爲よも祈れり願くは皆一よならん父や
 爾は我よ在りて我も爾よ在る如く願くは彼等も我等よ在りて一よな
 らん』イオアン十七の二十二二十三嗚呼我等が救よ於る主の仁慈と思
 とは大なり彼は其血をもて我等を贖ひしを足れりとし給はず我等を
 して廣く祈禱りて更よ大なるものを願はしめたりされども視よ祈り
 し時主よは如何なる望みありしや父と子と一たる如く我等も同様一
 たらんを望み給へりされば此よよりて我等は最早知り得べし主は
 其民を主よ於て和平ならしめんを望み此事の爲よ特よ祈禱し給ひし

ならば一たるとと和平とを絶つ者は罪を犯すと幾何なるかけだし不
 和は神の國に適せざるを既し知りたればなり。
 されば至愛なる兄弟よ我等祈禱立つ時は徹醒し心を盡して懇求を
 勉むべし。すべて肉體と世俗との思を棄て、祈禱する一事の外は他
 何事も心よ思はざるべし。司祭も祈禱先だちで或る胃頭の如く預め
 宣言し兄弟の心を預備せしめて「心を上へ向けよ」といふや民はこれ
 答へて「主よ向ひて」といふ、これ自今主の事の外何も思ふべからざるを
 自ら己れよ注意せしむるなり。願くは心を敵に閉じて獨り主よ開かん、
 願くは祈禱の時、當りて心は神の敵の己れよ近づくと許さざらんけ
 だし敵は屢々隠れ現ひて内部に透入り、鋭き詭計をもて民の祈禱を誘

去りて神より離れしむればなり、これよ由りて我等の心よは他物ある
 べく舌よも他物あらん、然れども祈禱は聲音を要するよあらずして智
 ど心と誠實なる注意をもて神に向ふを要するなり。さりながら主よ
 祈求むる時、當り注意を他よ走らし、愚よして且空しき思念の爲に誘
 去らるゝとたとへば此時よ於て汝よ神と談話するの事よりも別よ思
 念するを要するもの有るが如くなるは何等の等閑なるや、汝は自ら己
 を聴かざるよいかんして神より聴かれんとを望むか、汝は此の時、當
 り自ら己を記憶せざるよいかんして祈禱する所の汝を神の記憶し給
 はんと欲するか、これ即神よ祈るよ等閑なる祈禱を以てして神の高
 徳を辱かしむるといふべし。是れ即目は醒むれども心は睡るなり、これ

又反して「ハリステアニンは目の睡る時といへども心は醒めんと要するを雅歌(五の二)に録する所の如し曰く「我れ睡れども心は醒む」と故に使徒も勧誘していへり「祈禱は恒にして醒めよ」コロス四の二「これ祈禱は於て醒むるを神の照覽し給ふ者のみ願はんとする所を神は願得べきを示さるゝなり。
 且や祈禱する者は無結果なる及び裸体なる懇求をもて神は就くべからず無結果なる祈禱をもて神は懇求する時は其願は無結果なるべし。けだしすべて果を結ばざる樹は斬りて火に投入らるゝ如く「マトフニイ七の十九果を生ぜざる祈禱も何等の善行もあらざる無結果なるものとして神は價を有たざるなり故に神の書は我等に教へて曰く「禁食及

び施濟と共にする祈禱は善なり」トワイト十二の八「そも審判の日は當り慈悲の行の爲は報ゆるを爲す者は今日も同様の行をもて祈禱し就く所の者を仁心をもて聽かんとすされば百夫長コルチリイはかゝる方法をもて祈禱するや聽くを賜はりぬけだし「多くの人々は施を作して常に神は祈りたればなり」彼れ第九時當りて祈禱しけるは神の使其前よりわらはれ其行の爲は證を與へていへり曰く「コルチリイは汝の祈禱は汝の施濟とは既より昇りて神の前は記念せられたり」行傳十の一「我等の行を神の前は價あるものと爲す所の祈禱は速に神は昇らん、故に主は自ら「サイヤ」より我等を勧誘めて曰く「不義の縛を解き、鞭の梢をとき、虐げらるゝ者を放ちて自由ならしめすすべての鞭を折る飢

たる者よは汝の餅を分ち與へ流離る窮民を己の家よ入る裸なる者を見ればこれよ衣せ汝の骨肉を輕んぜず然る時は汝の光は平明の如くあらはれて汝は速いやするゝを得汝の義は汝の前よゆき神の榮光は汝を圍まん。さらば汝呼ぶ時は神は汝よきし汝叫ぶ時は我れこゝりといはんとす』イサイヤ五十八の六一九。それ其心よろくの不義の結ばれたるをとき神の誠命よ循ひて神の僕たる者よ施を行ひこれをもて神の命じ給ひし所よ從順を表して自ら神より聽かるゝ。適當する者よは神は其前よ現はれてこれをさしこれを保護せんとを約し給ふなり貧者を憐む者は神よ貸與へ小なる兄弟よ與ふるものは神よ禮物をさしぐるなり即心靈上よ於て芳香を神よ獻げて祭物と爲す

なり(フイラプ四の十八)。

聖カシアン曰くされば我等よ祈禱のいかなる式を裁判者より直ちよ授けられしを見よ我等はこれをもて祈禱せざるべからざるなり此處よは富有の事も名譽の事も權柄の事も身體の健全又は暫時の生活の事も願ひ或は想起すだにゐるなし永遠の造物主は空虚なる些細なる及び暫時なるものは何なりとも我等のこれを造物主よ願はんを欲し給はず故よ此の永遠よして善なる願をかるんじて速よ過去なるものと腐敗するものとを懇願せんと欲する者は彼の卓越と仁慈とよ至大なる凌辱を加ふるなりかくの如き人は其願の輕微しきよより裁判者の愛情を引かんよりも却て其怒を己れよ速かんとす。

此のあらはされたる祈禱は主の自から宣べられたるもの否立てられ
 たるものとして一見したる所よては完全の充滿を悉くこれに籠むる
 なり去りながら彼は其眞實なる者を最高尙なる地位に導き奮然とし
 て多くの人の考及ばざる且は研究し至らざる極めて言難き所の祈禱
 に導き到らしめん蓋し其悉くの人間の意思を超て聲音の響を以ても
 口頭の働きを以てもいかなる言語の配合を以てもいひ願はず能はず
 たゞ天上の光に耀き照らされたる智識のみ言顯はすを得べくして人
 間の弱き辨舌を以てせずたゞ感情の餘より大に豊よそしぎ出づると
 恰も或る最富める源泉より出づる如く主に向ひて言難く發出せん且
 其の發出するや最みじかき轉瞬の間ありて言顯すは難きのみなら

す己れは反るの智識も見廻すあたはざらんとす。

福アウグステン曰く此の七つの求望の間いかなる區別のありて存
 するに注意すべし。げだし今日吾人は暫時の生命を經過て永遠の生命
 を待望むべく而して永遠なるものはたとへ暫時の行を預め遂げたる
 後に移るべきものなりといへども彼は其價值に於て最第一のものな
 るより最初の三の求望に於て請願するものは此世に於て費す所の
 此生命に於て其始を受るよも拘はらず全きを成すは來生にありべく
 して來生に於て彼は力と完全とを得るなり彼處に於ては神の名も不
 斷に聖とせらるべく其國も終りあらざるべく其旨もすべて全く行は
 れ且遂げらるゝなり故に此の三者は我等に約されたる彼處の生命に

於て充分に成るを得べくして分つべからざる合同をもて現はれん。されども他の四つの求望は意ふ。此の暫時の生命に属す。其の第一は「我等が日用の糧を今日我等に賜へ」といふなり。さりながら此糧をこゝに生活に緊要なる糧即日用の糧と名づけらるゝは此糧の現時に属するを示す。そは此糧は或は心靈上思想に属するもの「神の言」を指し或は奥なるもの「主の体血」或は物質的なるものを指す。論なく今日ていふ言にて示されたればなり。これ「我がかく言ふは」心靈上の糧は永遠ならずといふ。よからず日用即生活に緊要なるものと名づけらるゝ心靈上の糧は聖書に於て或は分明に解り易き言をもて或は何か一時の前表より靈魂に與へらるゝものなるも人みな神より直ちに教をうけ「イサ

イヤ五十四の十三イオアン六の四十五真理の言ふ可らざる光を清き智識にて直切に汲まん時はすべてこれわらざるべきよるなり。又罪も此處に於てはたゞ我等がこゝに我等の負を免す如く我等も免さるれども彼處に於ては罪を免すべきの場所わらざらん。又誘ふ充たさるゝもたゞ此世暫時の生命のみなり。されども所謂「彼等」を汝が顔の覆の下に匿す。「聖詠三十の廿一」としるされし如く行はるゝ時は誘は既に復わらざるべし。終りに救はれんを願ふの惡も其惡より救はるゝとも共々此世の生命に属するなり。

「按ずるゝ七つの求望は聖神の七恩及びこれに符合するの諸福と關係を有つなり。神を畏るゝの敬畏は「心の貧しき者は福なり。天國は彼等の

ものなればなり』といふとの成る所以なり故に我等は「世々存するの神を畏る」『聖詠十八の十』清き畏れをもて汝の名の人々よ於て聖とせらるゝを願はん。虔誠は「溫柔なるものは福なり彼等は地を嗣がんとすればなり」といふとの成る所以なり故に我等は或は此處に即我等自己は神の國の臨み格らんを祈り或は喜び且願すべき主の光榮なる再臨に於て主と敵するとの鎮靜平熄むを祈らん。主はいへらく「我が父よ祝せられたる者よ來りて創世より以來汝等も備へられたる國を嗣ぐべし」『マトフェイ二十五の三十四』けだし預言者いへらく「我が靈は主をもて誇らん溫柔なる者は聞て樂まん」とす『聖詠三十三の二』超識は「泣く者は福なり彼等は慰めを得んとすればなり」といふとの成る所以なり。

故に我等は神の旨の天を行はるゝ如く地も行はるゝを祈らん。けだし地なる体の天なる靈とすべてに於て和合する時は復た泣くとのあらざるべきよよる何となれば此世もある所のものは一として此の我が二つの部分(体と靈と)の互に相戦ひ我等をして強て左の如くいはしむる程泣かしむるものあらざればなり。曰く「我れ吾が肢体の中も他の法ありて我が心の法と戦ふを見る」と而して此事に於ける我等の悲嘆を使徒は次の如く哀れなる聲をもて言わらしぬ。曰く「噫我は困苦の人なる哉誰か我を此の死の体より救はんか」『ローマ七の二十三、二十四』。勇毅は「義に餓渇く者は福なり彼等は飽くを得んとすればなり」といふとの成る所以なり。故に我等は「我等が日用の糧を今日」我等も與へら

るゝを祈らん、こは此種よて固められ且支へられていよく充分な飽
くを得んが爲なり。謀略は即「矜恤あるものは福なり彼等は矜恤を得
んとすればなり」といふとの成る所以なり故に我等も負ある者も負を
免して我等も負を免さるゝを祈らん、聰慧は即「心の清き者は福なり
彼等は神を見んとすればなり」といふとの成る所以なり故に我等は誘
ふ導かれざるを祈らん、こは我等何を爲すも論なくすべて關係せざる
所なき獨一の善を尋ねざると共に此世一時のものを追逐りて二心を
懐くとのあらざらんが爲なり、明智は即「和平を行ふものは福なり彼等
は神の子と名づけられんとすればなり」といふとの成る所以なり故に
我等は兇惡より救はるゝを祈らん、けだし此の教は我等を自由なるの

と爲し、即神の子と爲すより我等義子たる精神をもて「アウフ父よ」と
呼ばんが爲なり、ローマ八の十五、イオアン四の六。

「主が我等も祈禱よ於て神に向ふべきを誠命したる凡の求望の中よ於
て罪の赦しを請願する所のものは特別注意して思慮し給へるを看過
す可らざるなり、彼は我等を憐みある者となさん、を欲し、これをもて我
等自から憐みをうけて己が至大なる窮迫罪の困苦より免るべき獨一
の方法として指示し給ふなり、故をても我等は此事よ於て恰も神と條
件附約定をなし、ものゝ如く一の請願をも復神よさゝぐるあらざる
べし、けだし我等は此事よ於て「我等免すが如く我等も免し給へ」とい
へばなり、されば我等もし此約定よ於て偽るあらば凡の祈禱よより何

の結果もあらざるべし蓋主はいへらく『爾等もし人の罪を免さば天よ
 います汝等の父も汝等をゆるし給はん然れどももし人よ其罪を免さ
 ざれば爾曹の父も爾曹よ其罪を免し給はざらん』マトフェイ六の十四十
 五)
 又曰く通常祈禱する者が或は己の祈禱の感動をあらはさんか爲す預
 め言を擇び或は其後此の感動の情をいよく高めんが爲すこれ加
 んるあるべき他のいかなる言を我等いふありとももし規則正しく當
 然に祈禱するならば主の祈禱も含有まざらんものを我等は一言も
 能はざるなり例へば誰か言ふわらん『汝我等よよりて其聖なるを彼等
 の前よあらはす如く彼等よよりて其大なるを我等の前よあらはし給

へ』シラフ三十六の四)といふわらん、これ『汝の名は聖とせられ』といふよ
 非ずして何ぞや、又誰かいつわらん『万軍の主神や我等を起し給へ汝の
 顔は光りて我等は救はれん』聖詠七十九の八)と、これ『願くは汝の國は來
 り』といふよ非ずして何ぞや、誰かいつわらん『我が足を汝の言よ固め給
 へ』諸の不法の我を制するを許すなかれ』聖詠百十八の百三十三)と、これ
 『汝の旨は天よ行はるゝが如く地よも行れん』といふよ非ずして何ぞや、
 誰かいつわらん『我をして富ましめずまた貧しからしめず我よ要用よ
 して自ら足るものを與へ給へ』箴言三十の八)と、これ『我等が日用の糧を
 今日我等よ與へ給へ』といふよ非ずして何ぞや、誰かいつわらん『主や
 ワイドと其の悉くの温良を記憶せよ』聖詠百三十一の一)或は又いつわらん

ん「我が主神やもし我れこれを行ひもし我が手よ不義ありもし我れ惡
 を作すものよ報ゆるあらば」云々「聖詠七の四五」とこれ「我等よ負ある者
 を我等免すが如く我等の負を免し給へ」といふよ非ずして何ぞや誰か
 いふわらん「願くは口腹の欲と淫行とは我を占領せざらん耻なき靈よ
 我を付すなかれ」シラフ二十三の五」とこれ「我等を誘ふ導かず」といふよ
 非ずして何ぞや誰かいふわらん「神や我を吾が敵より援け我を攻むる
 ものより護り給へ」聖詠五十八の二」とこれ「我等を兇惡より救ひ給へ」と
 いふよ非ずして何ぞやさればもし汝はすべて聖なる祈禱の言を遍く
 點檢べんよ主の祈禱よ含有ざらんものを汝は一も發見すわらざるべ
 し故よ祈禱よ於て彼れ此れ言を互よして同一事をいふは汝よ自由な

るべしさりながらこれと異なる別事をいふの自由は汝よこれあるべ
 からず例へば誰か祈禱よ於て主よ我が富を増殖し給へといひ或はこ
 れを某よ與ふるだけ我よも與へ給へといひ或は我が名譽を大よせよ
 といひ或は我を此世よ於て有力者となし給へ高名なる者と爲し給へ
 といひ或は其他これと同様なるものよして其助けよより神の爲よ人
 々よ幸福を與へんと欲するよはわらずして直ちよ自分の爲よ幸福な
 るよよりかくの如きとを望願ふて此をいふわらんか思ふよ其人は自
 己のかくの如き嘆願を義とし得べきものを主の祈禱よ於て一も發見
 さざるべし故よこれを望むを心よ愧ぢずして請願するは要するよ耻
 づ可きなりさりながらこはたゞ此の如き望みよ克つべきの力を有た

ざるのみよてこれをもて耻づべき事と自ら識認するならばかゝる場
 合よ於て尤適當なるは即此の惡慾より救はれんとを主よ祈りて我等
 を兇惡より救ひ給へ』といふよ非ずして何ぞや。

『かくの如くなれば汝は自己の爲よはあらで我等衆人を教へ給ひし者
 の爲よ祈るべき眞誠の指示を有するなり主なる神よ請願して福樂の
 生命を尋ねべし。さて福樂の生命とはいかなるものか此事よ就ては人
 々多く思考へ種々様々よ決定するあり然れども我等は此の多くの思
 考と此の多くの決定とよ何の必要やある神の書は簡短なれども完全
 よこれを決定せり言ふあり曰く『主を其神とする人は福なり』聖詠百四
 十三の十五。我等此の人類の中よありて永く彼等と共に居るよ堪へん

が爲よ「勸戒の主意とする所は愛なり即潔き心と善き良心と偽りなき
 信仰とより出づるものなり」テイモフナイ前一の五。誠實なる希望は此の三
 者よ在り故よ信と望と愛とは祈禱する者を神よみちびかん我等は信
 じ且望み且慕ふて主よ願ふべき所のものを主の祈禱よよりて教へら
 るよなり禁食と他の肉體の樂みを節制すると特よ施濟は多く祈禱よ
 助くるなり。

『なほ汝よ一疑問の生ずるあらん何ぞや使徒は何故求むべき所を知ら
 ず』ローマ八の二十六といひしやといふ是なりけだし使徒も使徒が此
 事を書きて送りし所の者等も主の祈禱を知らざりしとは斷じて思ふ
 と能はざればなり使徒のかく言ひしは果して何故なるか無智よして

いひ又は偽りていひしよはわらざるべし。これ他の何の故もあらず
 憂患及び一時の大恐慌は我等の爲も最多く靈を救ふものなればなり、
 蓋こは或は驕傲なる自慢を醫すよる或は其忍耐を試みこれを練習
 せしめて其の試みられ且は練習せしめられたる者も最名譽として最
 も富める賞を備へらるよる或は又これより罪を罰し且潔めら
 るよよるなり、さりながら我等は諸の憂患の益を呈するを知らずし
 てこれより救はれんとを祈禱す使徒も自ら此の無知を免れ得ざりき
 そは彼れ多くの默示をうけて自ら誇るをなさらんが爲も其肉体は
 刺即サタナの使を加へられて彼を撃ちし時果して彼は求むべき所を
 知らずしてこれを己より取去られんが爲も三たび主も祈りしよより

て見ゆるなり、かくの如き人の祈りし時其の祈禱は何故きかれざりし
 や、又さかるよは何故有益よわらざりしやとの問も對しては我等次の
 言を聞くなり、曰く『我が恩は汝も足れり、そは我が能は弱きよ於て全く
 なればなり』コリンフ後十二の七一九。

『此の如く益を興ふべき所の此憂患も於て我等は求むべき所を知らざ
 るよ由り隨て害をも生せんとす、さりながら憂患は烈しく且苦しさも
 のなるよより人間普通の薄弱の故も我等はこれを己れより取去られ
 んとを祈るなり、然れども此の時も當り我等は要するよ我等の主なる
 神も善く從順を表はすべくたどへこれを我等より取去られざるあり
 ども我等の祈禱を輕んずるとは思はずいよく大なる忍耐をもて惡

害を身みに蒙かむりこれが爲たり更も大なる善福ぜんぷくを待またんとを要たするなり、
 けだし此この方法ほうほうより神かみの能ちからは弱よわきよ於おて全まったくなればなり、さりなが
 ら主しゅなる神かみは怒いかりより或ある不堪忍よかんにんの者もの譲やりて其その願ねがふ所ところのものを
 與あたへ給たまひしと猶使徒なほしとど對たいして仁惠じんけいを否いなみしが如ごとくせしをあり、かくの
 如ごとく我等われらは民數紀みんすうきを讀よむよ十一じゅういち章しやう以い色列人じりつじんが何なにを願ねがひて如何いかも其そのを
 受うけしを見るみるなり、さりながら彼等かれらの願望ねがひの飽足あきりしや次ついでで其その不堪忍よかんにん
 を罰ばつする重罰おもきばつも來きたりぬ、主しゅが願者ねがひもの王わうを與あたへしは願者ねがひものの心こころよりしよ
 て自己じこの心こころよよるよあらざりしとは録しるされしが如ごとく「サムエル前八の
 五七ごしち」主しゅは魔鬼まがきの願ねがひしものだも其その試こころみらるゝ僕わがを榮さかせんが爲たり、與あた
 へたりよイオフ一の十二じふにの六む彼かれは汚鬼よがきの願ねがひより其その全軍ぜんぐんを豕たぶ道みち

はすとさへ聽許きこしたりき、ルカ八の三十二さんじふにされば此こをしるされしは聽き
 かるゝ時とき雖なほも己おのれを大おほなるものと思おもはざらんが爲たり、恐おそらくは彼かれは
 願ねがはずんば更さらも有益いうえきなる可べかりしものを己おのれの不堪忍よかんにんよりて願ねがひしよ
 よる而しかして又またもし聽きかれざる時は落膽らくたんせず己おのれ對たいする神かみの憐恤あはれみよ
 失望しつぱうせざらんが爲たり、けだし彼かれは受うけて却かへりて苦くるみよかゝるべく、或ある
 は全まったく敗壞はいくわいして不幸ふかうの者ものとなるべきものを願ねがひしならん、是れぞ「求もとむ
 べき所ところを知らず」といふの場合ばあひなる故ゆゑも我等われらが願ねがひと反對はんたいなる事ことの生うず
 るあらば忍耐にんたいしてこれを己おのれに擔になふべく且かつ我等われらの爲ためも疑うたがひなく救すくとな
 るべきを確信かくしんじてすべての爲ためも感謝かんしゃを爲なすべし、願ねがひはすべてよ於おて
 我等われらの旨ねがひの成なるよはあらで神かみの旨ねがひの成ならんを、けだし我等われらの仲保者ちゆうほしや

はかくの如き模範を我等も授け給ひき、曰く「父よもし能ふべくは願くは此爵は我を過ぎん」とされども其後彼は人間の旨を父の旨に従はしめこれより加へて曰く「然れども我が欲する如くならずして汝の欲する如くなるべし」マコトフェイ二十六の三十九此より由り一人の願より多くは義者とならん」ローマ五の十九。

「願くはすべて汝の旨の如くなるべし」とたゞ此のみを主と願ひて此のみを要求する(聖詠二十六の四)所の者は眞誠安全なる幸福を願ふなり。されば彼は何も恐るゝ及ばざるべく願ふ所をうくる時も害あらざらん此の神の旨なくんば誰か熱切なる祈禱より何を受るありどもそれが爲る益あらざらん獨一眞實として有願なる生活は己を神の旨

に一任するよりこれ有する者は何を要求するありとも必ず受けん、けだし神の旨は適はざらんものは最早も求むるあらざればなり。誰か主の憐みを増加する者たる彼は「主の翼の蔭に頼るを得べく其の家の腹より飽き其の甘味の流れ」にて飽かしめられん、けだし生命の源は彼よりありて我等は彼の光に於て光を見ればなり(聖詠三十五の八、十)。

明治三十一年四月十四日印刷
同 年四月十七日發行

發
行
者
兼

堀 江 復

東京市本郷區森川町壹番地

印
刷
人

岡 本 文 治

東京市麹町區麹町拾丁目四番地

印
刷
所

岡 本 活 版 所

東京市麹町區麹町拾丁目四番地

發
行
所

正 教 會 編 輯 局

東京市神田區東紅梅町六番地



